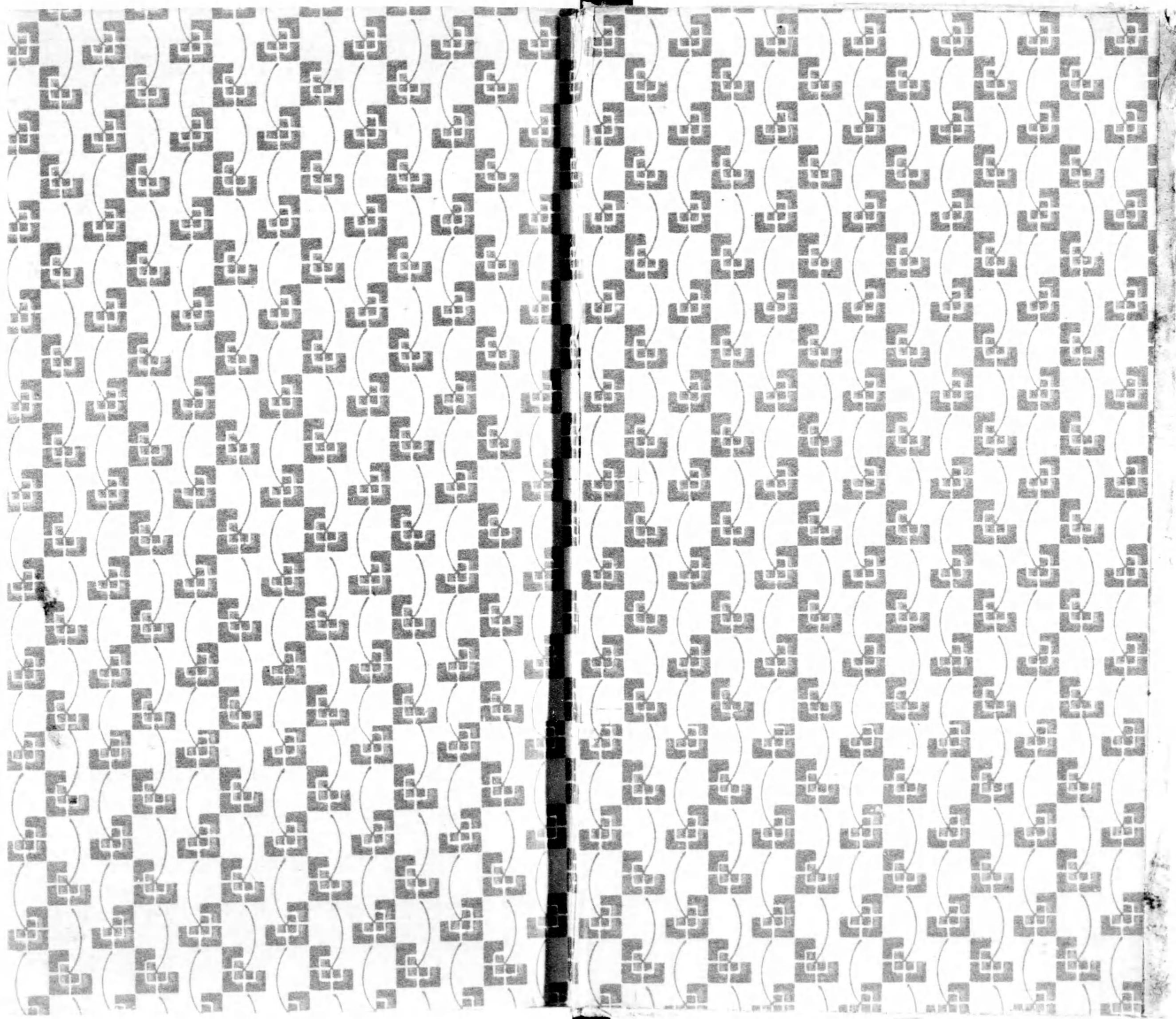




0^m 1 2 3 4 5 6 7 8 9 10¹⁶m 1 2 3 4 5

始





特100
125

王偵探對王罪犯

譯 秋 玉 田 武



〔東京・紅玉堂書店〕

10 9.17
肉交

犯罪王對探偵王目次

一	「惡漢の巢窟」……………	一
二	名探偵の活動開始……………	三
三	帷の蔭……………	五
四	女の慘屍體……………	九
五	ルパールの激怒……………	三三
六	脅迫狀……………	四四
七	白晝の銃聲……………	五九
八	犯人搜查……………	一〇一
九	屍體冷蔵庫……………	二二七

十	血染の署名	………	三六
十一	砂の雨	………	三五
十二	ジョゼフインを追跡して	………	二八九
十三	衝突	………	三三三
十四	暗夜の逃走	………	三五九
十五	サンブロン急行車の椿事!	………	三八〇
十六	ベルシイ倉庫の悲劇	………	三九七
十七	屍體陳列所	………	四三六

犯罪王對探偵王目次終

本篇主要人物

フアントマ……佛蘭西全土に頻發して、世界を震撼する怪事件中に現はれる兇手、此處にあるかと思へば彼處に現はれ、捕へんと欲すれば煙の如く消え、投獄すれば其の翌日早くも獄を抜く稀代の悪漢。世人は之を呼ぶにフアントマと云ふ。フアントマとは幻小僧と云ふ程の義か。ギユルンと云ふのが其の本名である。輕捷敏活、奇智縱橫。

ベルタム夫人……駐佛英大使の未亡人。古い言葉ながら、戀は曲者と嗟嘆せざるを得ない。ふとした事からギユルン即ちフアントマに馴染めて、次第に惡の底へ沈淪する不幸な婦人。終にはフアントマと共謀して自分の良人なるベルタム卿を殺害し、危く處刑をまぬがれて以來、清き生活に入る。

シヤレツク……醫師

犯罪王 對 探偵王

武田玉秋 譯

一、悪漢の巢窟

『赤を一つおくれよ！ コルンさん。』

エルネスチンは掠れた聲でそつと言つた——が其の聲を聞き取る事は出来た——煙の朦々と立籠つた酒場の中には、何時ものやうに此の家の常連が寄集まつて、怪しげな果實酒や、強いアルコールなどを飲みながら、自分々の仕事の事などを話合つてゐた。時は夜の十時頃である。

ルパール……悪漢團の首領

ジヨゼフィン……ルパールの情婦

マルシヤル……商人

ラリボアジエール……病院長

フアンドール……此の青年はフアントマの爲めに散々苦しめられた後、ジューヴ探偵に漸

く救はれ、ジューヴ探偵の周旋を以て新聞記者となり、殆どフアントマ事件専門の記者となる。本名はシヤルル・ランベルと云ふ。フアンドールはフアントマより作り出したる名にして、之をフオンドルなど、云ふは當を得ざるものなり。大膽不屈の好青年。

ジューヴ大探偵……剛毅潤達、不撓不屈。敏速なる事風の如く、沈着なる事山の如し。警視廳警視。

「赤だよ、好いね！」と其の女は念を押した。髪の毛は茶色で、眼の縁に黒い環のあるあばずれ女で、皮膚は過去の放埒で弛んでゐた。昔は男を迷はせたらしい其の顔には、あらゆる罪惡とあらゆる淫蕩の痕と、残忍性とを漂はせてゐた。コルンにも其の女の聲はよく聞えたけれど、金聲の眞似をして、其の註文に應じようとはしなかつた。

其の親爺は頭の禿げた、口髭を生やしてゐる大男で、酒壇だの錫の升だのが混雜に並んでゐる帳場臺の向ふにつき切つてゐた。其の帳場臺は丁度此處の得意の全部を占めてゐるあぶれ者共のゐる場所と帳場とを、嚴重に仕切つてゐるやうに思はれた。

コルン親爺は、其の時袖を二の節まで捲り上げて、毛むぢやらかな腕をによつさり出し、コップだの匙だのを洗ふ湯桶の中につゝ込んでゐた。彼の足はシロ

ツブや酒壇の底に残つた澱の流れた土間に絶へずぐしやついてゐた。

此のあぶれ者共の集會所の酒場は、かう云ふ建物皆一様の建方である通りそれ／＼一つ宛出口のある二つの部屋で成立つてゐた。上等の部屋はシャベル廣小路の側にあつて、飲んだり喰つたりする部屋である。其處ではコルンの女房が見張つてゐた。奥の扉を押開くと、八階建の大きな家の庭に出る。其の庭を通り越すと、もう一つの部屋である。天井の低い、薄暗い部屋で、炭屋町に向いてゐた。此の街は人氣の悪いので近所界限に有名である。

三度目に前よりも嚇すやうな調子で怒鳴られると、コルンは脂ぎつた湯の中で自棄に皿をガチャつかせながら、不性無精に返事をした。

探るやうな眼で女の周圍を窺つて見ると、碌な奴はゐさうに無い。女の座つてゐる卓の周圍には、二三人顔の蒼褪めた若僧がゐた。様子も悪ければ、着物

も檻樓で、いざと云ふ時女に花を持たせてやつてくれさうな人間は見當らなかつた。

女は其の様子を見ると、酒場の親爺の腹が解つた。其處で客を押分けて帳場の傍へ來ると、其の上に兩腕をかけて、ぞろ／＼コルンを口説きにかゝつた。親爺は女に喋らせておいて、けろりかんと天井を眺めてゐた。すると女が息を嗣ぐとて口を噤んだので、彼は其の瞬間を利用した。

「他處の國の話をして、俺を困らせるやうな悪さは止しにしませうよ。私は知つてゐるせ、お前さんところのミ、イユだのミ、イユの事件なんざ御免だよ。懲治監を出ようと、懲役に入らうと、其處事ア其方の勝手だあね。何の擔保になるものか。二法と言つたら二法さ、それも即金だよ。」

エルネスチンは盛に強請つたが效能はなかつた。其處で業腹紛れに口を尖ら

して減らず口を叩いた。

「……好いよ、お前みたいな解らずやにやもう頼まないや。成程ねえ、お前は一文にでもなれば國でも賣ると云ふ噂だが、それも其の筈だねえ。コルン夫婦が獨逸者だてえ事は、此の街中知らない者はないんだからねえ……」

エルネスチンは亭主を煽動上げて、負けぬ氣を起させようとしたけれど、親爺はニヤ／＼笑ふばかりで、相變らず皿を洗つてゐる。勿論女の註文したものは出來て來はしなかつた。

其處で今度はすらりと客面を見廻した。皆んな見知り越しの連中である。そして要るだけの先拂をしてくれさうな、其處氣前の好い人間も、又懷中の暖かさうな連中も、居合せてゐない事まで見知り越しであつた。

暫時してから、入口に構へてゐるツールンエ婆さんに聲をかけて見ようか

とも思つたが、此の贓品などを賣つて廻る婆アが、たとへ金があつたにしたらと
 ころで、擔保なしで貸すやうな、そんな生優しい奴で無い事はよく解つてゐた。
 エルネスチンがもう一度亭主に懸合つて見ようと思つてゐると、突然部屋の
 隅から太い聲がした。

「おい、やつとくれ、ユルンさん、俺が引請ける。」

二三人の男が、誰だらうと思つて一齊に振返つて見ると、其れは「工兵」と云
 はれてゐる男であつた。

誰も其の工兵と云ふ綽名しか知らないが、話に依ると、二十年前亞弗利加に
 ゐて、大隊だの、懲罰隊だの、ランベツスの監獄などを渡り歩いて來たと云ふ
 噂だけ解つてゐる男であつた。

工兵がさう云ふか言はぬうちに、エルネスチンの後に隨いて、忽ち若僧共が

テーブルの周圍に集まつて來た、挨拶は手取早く済む。一目顔を見合はせれば
 それで直ぐ信頼して了ふのだ。

がエルネスチンは禮儀上工兵の傍へ座らうと思つて椅子を探した。すると工
 兵の伴れの男が、頭を俯向け、肩を窄めてよろ／＼と立上つた。

「此處は窓が近過ぎらア。」

そして後は何とも言はずに、酒場の奥でこそ／＼と小聲で話をしてゐる連中
 の方へやつて行つた。

「あれやノネなんだよ。」と工兵がエルネスチンに言つた。

が女が解つたやうな解らぬやうな顔付をしてゐるので、

「ノネを知らないのかい？…ヌーエルから歸つて來たのさ…退去命令を喰つた
 ものだから、顔を見せるのを嫌がつてゐるのだ。」

「あゝさう。」

ノネは酒場を横切つて、綺麗な女の傍に暫時立停つてゐた。娘の傍に席が取つてある處を見ると、誰か來るのを待つてゐるらしい。ちやんと一ぱい詰まつてゐる壇がもう用意してあるからには、間も無くやつて來る事も大凡見當がついた。

「何かい、ルバールを待つてゐるのかい、え、ジョゼフィンさん？」とノネは女の差出す手に一寸指を觸れて尋ねた。

娘はノネを睨むやうに見た。其の大きな碧眼と、眞黒な髪とが妙な對照を作つてゐた。

「當り前さ、ルバールと一緒にゐるのは昨日や今日の事ぢや無いよ……」

「成程ね、何時席の空く事やら……」

「お氣の毒様、お前さんに關係がある事ぢやなし……」

さう言つたなり娘は男を見向きもしなかつた。此の界限で通り者のカルレと云ふ綽名のついたルバールの色女は、帳場臺の上にある時計を見ると、急に立上つて酒場から出た。

娘は炭屋町を足早に通つて、廣小路をバルベ停車場の方へ行つた。マジヤンタ通りのあたりへ來ると、足を緩めて巴里の中部に向つて歩いて行つた。

「お、ジョゼフィンさん？……」

酒場を出てから慎しやかに歩いてゐた娘は、眼のキラ／＼光る、愉快さうな顔をした一人の肥つた男に出會つたのである。が其の眼は一つきりで……も一つの方は瞑つてゐた。願髯を伸して山高帽を冠り、手にはステッキを抱へてゐた。

紳士である事は直ぐ解る。其の衣裳を細かに見た者は、『立派な紳士だ!』と吐く事であらう。

「大へん遅いですね?…またあの夜明しさせる製作場ですかね?」

ルパールの色女はにつと笑つた。製作場か?…成程ね。

「え、さうです…御免なさい、マルシャルさん。』と言つて女は歩きかけた。すると男は意味ありげな手つきでそれを止めた。

「私の名を言つちやいかん!…もう直ぐ私の街だからね。』さう言つて彼は時計を取り出した。『今日は火曜日だ!…よし、土曜日に私はブルゴーニユへ行く。八時十五分、リイヨン停車場、二號昇降場でマルセイユの急行だ…好いね、八時十五分だよ…そして月曜日に歸つて来るんだ…可愛い、人と日曜日を楽しく暮さうと云ふ寸法さ…え、何だ?』

男は夢中に喋り立てゝゐるのを止めた。

暗がりから一人の乞食が出て来て、物乞をするのである。

「お情けでございます、どうぞ旦那様!」

「何かお遣りなさいな?』とジョゼフィンが勧めた。男も女の言ふ通りにした。そして女の手をそつと引張つて、逢引の事を細々と繰返して呟いた。

「リイヨン停車場…八時十五分…八時十五分に汽車が出るんだせ。』

それから握つてゐたジョゼフィンの手を放して、

「ちや左様なら…私は遅くなるからね…早くお母さんの所へお歸りよ…そして

土曜日だよ!」

肥つた男の姿は暗の中に消えた。

ジョゼフィンは男の姿が遠くへ見えなくなる迄、ちつと佇んで見送つてゐた。

それから肩を聳やかして、踵を返し、席の取つてある以前の「悪漢の巢」へ戻つて来た。

酒場の奥では、ノネの連中が何かひそひそと内證話をしてゐた。

数字組の頭で、バルビユと言ふのが、其の日の事件の事を話してゐた。仲間のリポノーと云ふ男が、懲役に行くとか行かないとか、裁判が奈何だつたとか斯うだつたとか、頻りと話をしてゐた。

ふと一同は話を止めて耳を傾けた。外から喚き聲が聞えて来た。其の聲が段々高くなつて行つた。ばた／＼と忙がはしく馳け廻る足音、衣を裂く様な悲鳴罵り騒ぐ聲、逃げる者と追ふ者とが濕つた路の上を滑つたり轉んだりして追駆け合つてゐるらしい様子であつた。固く締つてゐる扉へ、何だかどしんとぶつつかる音がした。がら／＼と硝子が割れて落ちる。少し鎮まつたかと思ふと、

直ぐ又何か恐しい物音がした。やがて又ばた／＼と駈けて行く様子であつた。亭主のコルンは帳場臺を離れて、入口に突立つて緊密扉の錠を押へつけて、どさくさ紛れに喰逃げする者の無いように、又外から這入る事の出来ないように番をしてゐた。

「泥棒だな！」と彼は小聲で呟いた：

家の中になつて見るのだから心配はなし、安全だと云ふので、客一同も面白がつて其の様子を見てゐたが、さうした事は浮浪者の巢窟では常住の事で大して珍しい事ではなかつた。

最初男に捨てられた女共が、夢中になつて逃げ走りながら、隠れ場所を探してゐた。監獄だのサンラザールへ入れられるのが怖かつたし、何よりも嫌だつたのは、たとへ少しの間でも窮屈な思ひをする事であつた。此等の女の目に

は、自由氣儘なのが一番の幸福であるからだ。
 其の女達の後から、警官達が追駈けて来て、女共の物蔭に潜んだり、袋町に隠れたり、まだ締つてゐない家へ飛び込んだりする隙をも與へず引捕へようとして迫つたのである。
 やがて其の連中も遠離つて、騒動が鎮まると、炭屋街は何時もの暗くて淋しい、薄氣味悪い街となつた。
 酒場の人達は其の騒ぎに氣を取られてゐたので、奥の方の入口から、獸のやうな顔をした頑丈な男のはひつて來たのを、誰も知らないでゐた。其の男はトヌリエと云ふ綽名で通つてゐたが、自分の入つて來たのを誰も氣のつかぬのに、格別氣持を悪くするでも無く、直ぐ數字組のバルビユの座つてゐるテーブルの方へ行くと、一寸傍へ伴れて行つて早や話をしてゐた。

『例の事ですがね、どうやら今週の終りらしいやうですよ。私が停車場へ着いて、マジャンタ通りを通りかゝると、ジョゼフィンと立派な男とが、頻りと話をしてゐたものですからね、二人の話を聞いてやらうと思つて、乞食に化けて出たのですよ。するとルバールの女が諜し……』
 ふと彼は口を噤んだ。バルビユに眼交で制止されたからである。
 一同は通りの方にある入口を注視した。扉が大きな音と共にぱつと開いて、ルバールと例の情婦のジョゼフィンとが、眼を輝やかし、唇に笑を湛へて入つて來た。
 人々は一齊にあつと叫んだ。ルバールには巡查が二人附添てゐたのである。
 『オヤ、奈代しやがあつたらう？』と誰か呟いた。
 ルバールにも其の聲が聞えたけれど、悠然として入つて來た。彼は扉口に待

つてゐる巡査の方を振り返つた。

『有難うムいました。此れ迄お送り下さつて誠に有難うムいます。これで私も安心致しました。どうぞ一つ召上つて、官憲の健康を祝させて下さい！』

まだ立去らなかつた巡査達は、一寸躊躇らふやうに見えたが、二言三言辭退をして立去つた。

一同は呆氣に取られて、ルパールの説明を待つてゐた。ルパールは微笑した。

『驚いたらう、え？何ね、俺が懐手をして、女の事を考へながらやつて來るとあの騒ぎだらう。大勢の奴等がばらばらと逃げて來て俺に突當るのだ。自體此の町の者はどれもこれも安閑としてゐられる奴はありやあしないから、かう云ふ嫌な話はあまり好まないけれど、其の嵐を遣過しておいて、十九番目のあの二人の巡査に、此處迄ついて來て貰へますかと、叮嚀に頼んで見たのだ……怖さ

うな風をして見せたのさ……それだけの事よ！』

一同は大笑ひした。併し何も刑事や巡査を馬鹿にした譯では無かつた。本當にルパールは自分の家に歸つたのである——ルパールはコルンの家に住つてゐたのであつた。

が、彼はジョゼフィンに尋ねかけた。

『それで奈何して戻つて來たんだい？』

娘は三週間ばかり前から好く出會ふ紳士とマジヤンタ通りで出會つた事や、其の男が自分を何處かの勤人だと思つてゐるらしいと云ふ次第を、小聲に戀人に物語つた。

ルパールは頻りと黙頭いてゐた。

そして土曜日に出會ふ約束をしたと云ふ事を聞くと、

「占めく〜！ 今週は大漁だよ！ 此奴を外しちやならないぞ。よし〜、お前は手書だ、なあジョゼフィンさん、お前の手書きの處を見せて貰ふ時だ。丁度手紙を一本書いて貰ひたいと思ふのだがね。ペンとインキとを持って来て、俺の言ふ通りに一つ手紙を書いとくれ。」
 そしてルパールは口授した。

取急ぎ文してしめし上げり〜。妾事貧しき乙女の身には候へ共、徳義と名譽とは重んずる者に御座候。さ候へば悪事を致す者ありと知りつゝ、之を見過しに致し候はん事、如何にも心外に存じ候儘、不躰ながら一筆申上參らせ候。御許様此の文御覽遊ばし候。上妾の申上ぐる言葉を御信用遊ばし候はば、妾の身邊にある或る男に、篤と御注意遊ばされ度存上參らせ候。妾事

ルパールと申す者の情婦なる事は、既に警官の方々より御聞及びの事と存じ候。妾はそれを隠さんとする者にては無之、寧ろ夫れを誇と致居る次第に有之候。然る處、簡短に申上ぐれば妾の聞き及び候事は、次の如き次第にて此れの眞實なる事は妾が母の命にかけ候ても誓ふ所に有之候。其はルパールが悪事を爲さんと致す事に御座候…

ジョゼフィンはペン持つ手を控へた。

「まあ、貴方は奈何かしたの？」

「好いから黙つておわでよ……」

娘は心配さうな色を泛べてちつと、戀人の顔を見成つた。

「だつて心配しないぢやわられないわ。此麼事を言つてゐる貴方の心が、妾に

「やちつとも解らないんだもの！」

「好いよ、解らない方が好いのだよ！……」

「だって本當に悪い事をする氣なの？」

「で本當だつたら？」

ジョゼフインには譯が解らなかつた。自分の情人が悪事をする、それはまあ許すとしても、何の目的で自分で自分を告發するのか？何が爲めにまだ爲ない先から告發するのか、彼女には皆無腑に落ちなかつたのである。

世界の誰よりも、最もそれを秘密にし、保護し、味方すべき筈の戀人に、かう云ふ役目をさせようとするのは、一體奈何云ふ譯なのか？

「お前に關係した事ぢやないから。」と云ふルパールの顔を眺めてゐたジョゼフインは、其の事情は後で聞いても解ると思つたので、温和しく手紙の後を促が

した。

がルパールは口を開かなかつた。

彼は今エルネスチンや、若い男達や、親分氣取の工兵達の連中を眺めてゐた。

「あゝ、さうさ、』とエルネスチンがミ、イユと云ふ若者に言ふ。すると工兵もそれに賛同するやうに頷いた。『あゝ、さうさ、ルパールの次にやバルビユが數字組の親方になるのさ、當り前の事だあね……』

ミ、イユは不審さうな眼付をした。エルネスチンは言葉を續けた。

「數字はね、ねえ工兵さん、自分の身分を表はしてゐるやうなものでさあねえバルビユの仲間になるにや、せめて一度は危い瀬戸を渡らなきやならないのだよ。一大事件を潜つて來ると、一と云ふ番號がつくのさ。そこで人二人殺した者にや二、三人殺した者には三と云ふ數字がつくのさあね、紋所みた様なもの

さ。

「ぢや、處刑をされたリボノーは、七と呼ばれてゐたが、あれや奈何云ふ譯なんだい？……」

「あれや七人やつ、けたと云ふ譯さ。」と工兵が勿體らしく答へた。

其の問答で、眼も放たず其の方を眺めてゐたルパールは、其の時迄自分を知らないでゐるミ、イユの身の上を推察した。

忽ち彼の好奇心は満された。若者の顔は勿論彼に好印象を與へた。二人の視線が出會つた時、ミ、イユはルパールの眼色に、自分に對して好感情を抱いてゐる事を見抜いたのである。

シヨゼフインは再び催促した。

「さあ夫れから奈何書くんですか、ルパールさん？何故黙つて了つたの？妾が

横口を出したからなの？」

ルパールは女の言葉に生返事をしながら、椅子から跳り上り様、つと半分残つてゐる酒壇を引摺むと、發矢とばかり土間へ叩きつけた。酒壇は微塵に碎けた。

其の有様に驚いた一同は、身を避けようと思つて押合つた。するとルパールは吼えるやうな聲で怒鳴りつけた。

「蠅共が煩さいので止めたのだ……えい、畜生奴！此奴等は何時になつたら斃ばりやあがるんだ！俺アあれが嫌ひだ！」とエルネスチンを睨みつけながら「今から直ぐ此處から出て失せやがればよし、さもなくばうぬ、奈何するか見ろ！」エルネスチンは眼を血走らせ、憤怒の爲めに緊と拳を握つたが、諦めたやうに俯向いて、言はるゝがまゝに出て行かうとした。此處ではルパールが君主で

あつて、決して其の意に逆らふ事の出来ない事を好く知つてゐたのである。工兵は口の中でブツ／＼小言を言ひながら、錢を掻き集めて肩を揺つた。そして苦情を言ふでもなく仲間のノネを呼んで、エルネスチンの背後からこそ、そと逃げ出した。

亭主のコロンも喧嘩になつては大變だと云ふので急いで彼等の後から外へ押出してやつた。

けれどもミ、イユは憤慨した。彼は本能的にポケットへ手を突込んだ。ルパールも其の態度を見過しはしなかつた。皆んなの中でジョゼフインの恐しい情夫に、敢然頭を擧げたのは彼唯一人であつた。

「其の様は何だ！弱虫奴！」と工兵が外へ出る後から、追被せるやうにルパールが憎さげに怒鳴つた。

がルパールの手はつとミ、イユの肩にかゝつた。ミ、イユはぶる／＼體を震はしてゐたが、亭主が頼むので不性無精堪へる事にした。

「此處へ坐れ、お前は利口さうな奴だ。俺達の仲間になれ……」

と忽ちミ、イユの顔付が變つた。其の蒼褪めた顔に紅い血の氣がさして來た。眼は喜ばしげにキラ／＼輝いた。

「え、私を數字組に入れてくれるのかい？」

「當り前さ。」とルパールは謎のやうに答へた。

そして其の蒼褪めた男を酒場の奥へ押しやつて、

「バルビユに其の話をしなくつちや不可よ……」

新子分がお禮を言ふのを聞き捨てにして、ルパールは再びジョゼフインに書取を初めさせた。

工兵とノネとは其の最後の言葉を聞いた時、漸く其の酒場を離れた。工兵とノネとは顔を見合したが、やがて足早に炭屋町を降りて行つて、シャペル通りへ出て行つた。

「ねえ、探偵長、今夜は奈何したんです？」

工兵と云ふ綽名でシャペル通りの無頼者共の間に知られてゐる男はミシエル探偵に外ならなかつたのである。彼は靜かに鬚を捻つた。

「大した事ぢやないよ。二三日中にかける網に洩れる奴さへなければ、それにルパールに手を焼くやうな事へさなければ、何方だつて同じ事だあね。」

「奴等を何故今夜一網打盡なさらなかつたんですか？」と警視廳ではレオン探偵で知られてゐるノネが尋ねた。

「君は勝手な事を言つてゐるよ。二十に對する二で奈何して勝を制しようとい

ふのだね。一ト月三百法では一寸やる事の出来ない藝當さ。」

二人がかう話合つて行く頃、無頼漢の巢窟の煙の立籠つた部屋の真中では、ジヨゼフインがルパールの口授で手紙を書いてゐた。

ルパール事明朝七時に、カルメンと申す酒場へ參るべく候。此の酒場は貴方様も御承知の通り、モンマルトル郊外を上つて右側、ラマルチン街へ出る手前に有之候。ルパールは夫れより醫師シャレックが許へ押入りて金庫を破る筈に御座候由、我が戀人の事をあられも無く申上候事は、妾とても申上度は候はねど、且又庭に向つて露臺のある事務室の奥の窓際に据ゑつけある其の金庫より、唯金子のみ盗み出すと云ふだけの事に候へば、妾とて斯様な事申上ぐるまじく存じ候へ共、妾の與り知らぬ事ながら、一婦人の爲めに

盗み騙りよりも尙ほ悪しき事を、爲すらしき様子に御座候故御知らせ申上げたる次第に御座候。此れにて妾の承知致候事は總べて盡したるつもりに存じ候、此れ以上は申述べ難く候へば、何卒宜敷様御取計らひ遊ばし下され度、且は此の文の何人より來りたるや、ルパールには必ず相知り不申候様暮々も念じ上げりかしこ

さて宛名を書く段になると、ジョゼフインは膽を潰して、ぶるぶる震ひながら、鳥渡書く手を止めた。

『まあ！奈何したの？ 貴方は奈何かしやしない？ 一體此れは奈何云ふ事なの？ ルパールさん、本當に貴方變だわよ、酔拂つたのね、屹度酔拂つたんだわ……』併しルパールには酔つたやうな風もなければ、氣の狂つたやうな様子もなか

つた。彼は靜かに命令した。

『俺の言ふ通りに書けば好いのだ……』

其處でジョゼフインも致方なく太い拙い字で……ジョゼフイン・ラモウ……と書き上げると、

『さあ封筒に入れとくれ。』とルパールが言つた。

と其の時、部屋の奥からバルビユが彼を手招きした。

『何だ？』とルパールは横槍を出されたのに腹を立て、尋ねた。

『怒らないでおくれ、大切な事なんだ。停車場の男の工合だがね、今週の終迄には、遅くとも土曜日には巧く運がつくよ。』

『すると四日間のうちだね？』

『うん、四日間のうちだ。』

「よし、支度をさせよう：梨は大きさうだね？：」

バルビユは彼の離れかゝつたテーブルのあたりをちらと見遣つた。

「トンヌリエの話では、何でも五萬法は大丈夫だらうと云ふんだがね：」

ルパールは頷いた。そして一言も言加へないで、眼顔でバルビユを追やると
 ジョゼフインの傍へ戻つて来てかう言つた。

「封筒の上には、巴里警視廳警視、ジューヴ様と書いてくれ。」

二、名探偵の活動開始

都新聞の編輯は終つた。

記者連中は今其の日の記事の原稿の最終の一葉を手放した。編輯室は急にざわ／＼ざわめき出した。

「時にフアンドール君、君の原稿はもうありませんか？」と編輯員が尋ねた。

「え、ありません：」

「君は今しがた持つて来やしなかつたのかい？一の方を機械にかけさせても好いんだね？」

青年記者は頷いた。

「何にも持つて来やしませんけれど、今大統領が暗殺されたと云ふ電話でもか

「ければ、早速其の記事をあげますがね。」

「冗談を言つてちや困る。それどころの騒ぎぢやないんだよ。」

其處へ整版工が編輯室へやつて来た。

「一の方に一欄と、二の方に八行ばかり欲しいのですがね。」

仕事に慣れたファンドールは、それを聞くと編輯員の探るやうな眼を避けてこそくと逃げ出した。後では編輯員が一人の記者を呼んで、かう言ひつけてゐるのが聞えた。

「二三行要るんですがね……八行です……通信社の電報で、クレート島問題でも取つて来てくれ給へ、早くだよ……」

ファンドールの方では、帽子やステッキを取ると、さつさと新聞社を抜け出した。

世間で好んで言ふやうに、(刑事記者)と云ふ彼の位置は、絶えず活動し、雑沓混亂してゐる道を行くやうな役目であつた。自分の身が自分の氣儘にならなかつた。家へ歸る隙が出来たのやら、大臣を訪問しなければならぬのやら、旅行に出かけなければならぬことになるのやら、或は殺人犯人や詐欺や、ありとあらゆる悪漢を追廻して、生命を賭するやうな事になるのやら、十分先にする事が、皆無解らぬ境遇であつた。

「畜生！」と新聞社を飛び出した彼は、時計を見て呟いた。『どうでも裁判所へ行かなきゃならないのだが、すつかり遅くなつちやつた……』

彼は五足六足馳け出したが、つと立停つた。

「ベルギルの門番殺し……此方へ行つた方が面白いな……」

彼は後戻りして狭いモンマルトル街を壓してゐる貸馬車を探した。此の狭い

街通りは通行人の往來で雑沓してゐた。馬車や、鈍い荷馬車や、大きな自動車や、さうしたあらゆる車の群が相馳驅して、巴里の街々を他の首都には見られないやうな熱鬧場に化してゐた。

ベルジエール街の角を通り越さうとする時、見本の函を天秤棒で擔つて、嘘のやうにうんと背負込んだ運搬人が、ぱつたり彼に突當つたので、危くひつくり返りさうになつた。

『氣をつけろ！……』と青年記者はつと振返り様怒鳴りつけた。

『そつちの方も氣をつけろ！』と其の男も太い聲で言ひ返した。

『何ッ！ 君こそ氣をつけるのが當り前だ……謝まつて然るべきぢやないか……』

……それなのに……』

男は憎さげにせゝら笑つた。

『さうかね！……』

そしてフアンドールが肩を聳やかして、早や歩き出さうとする時、男はそれを引止めた。

『クロアサン街は何方の方へ行くのですか！』

『モンマルトル街を行つて、二番目の筋を左に切れるのだ。』

『さうですか、有難うムいしました。』

フアンドールが再び歩き出すと、その男は又もや彼を呼止めた。

『失禮ですが、先生、煙草を吸つてゐらつしやるお序でに、一寸火を一つ貸して下さいよ。』

フアンドールはほゝ笑ますにはゐられなかつた。彼は其の男の方に巻煙草をさし出した。

「さあ……」

そして相手の其の自然的な無作法に吊り込まれて、

『今日の仕事はそれで仕舞ひなのかい？……』と何の氣も無く尋ねて見た。男はそれに腹立ちもせず、

『へえ、だが一杯飲ましておくんなされや……』

フアンドールは運搬人に小酷く言つてやらうと思つたが思ひ止つた。

其の男は六十歳位の爺さんで、其の様子と來たら實に痛ましい位惨めな有様であつた。汚ない着物を着、頭には汚れた山高帽を被つてゐた。其の又帽子が大きいので、頭がすっぽり入つてゐた。其の胴衣も青色に褪めて擦り切れてゐた。ネクタイも古ぼけたもので、踵の減つた靴の上のズボンも裾がすたすたに裂けてゐた。

フアンドールは恁那男を會つて見た事がなかつた。

けれども相手の言葉に驚いて、ちつと其の男を見守つて見ると、何處だか知らないが、何だか見た事のあるやうな氣がした。其の顔にも、其の眼にも、亂れた願髻や先の黄色くなつた、長い、ガウロウ風に伸びて、唇に掩被さつてゐる其の口髭にも、何だか見覚えがあるやうな氣がした。

『飲ませうだつて？ 何だつて君に飲ませるんだい？』

『巧いもんだらう、フアンドール君！……』

突如に自分の名を言はれたので、青年記者は跳り上つた。

相手の男は自分等の近所に誰もゐはしないか、二人の話を誰か聞いてゐる者はありませんかと思つて、ちらと四邊を見廻した。

と俄然其の顔の筋肉が動いたかと思ふと、顔つきがすっかり變つて了つた。其の男はもう今迄の顔ではなかつたのである！ ファンンドールは自分の眼前に前とは全く別な男の立つてゐるのを見た。彼も自分の話をしてゐる男が誰であるかと云ふ事を、明瞭に認めたのである！……

長い間に自己の職業上の必要から、自分の感情を隠す事に慣れてゐるファンンドールは、驚きを押へて、何氣ない高い聲で、相手に見違へてゐたやうな様も見せず言ひかけた。

「よし、それぢや奢つてやらう……」

「何處でね？」

「グラン・シヤル、マーニユは奈何だい？」

二人は一緒に歩き出して、モンマルトル郊外に出ると、見かけの汚ない一軒

の酒場へ這入つて行つた。其の店は商人や、店員や、際物賣や、青年記者の殆ど知らぬ連中が出入してゐた。

二人は部屋を横に床几の二脚宛向ひ合せに置いてある奥まつた所へ這入つた。「私にや濃い赤だよ……」と伴れの男は給仕に言つた。

ファンンドールも躊躇せず下俗な食物を言ひつけた。

「僕にはメレカをくれ……」

給仕が立ち去ると、ファンンドールは伴れの男を顧みた。

「奈何なすつたんです？」

伴れの男は肩を揺つた。

「君は友達を思ひ出すのに、滅法長くかゝるんだね……」

「巧く皺を寄せたものですね。姿の變つてゐるのは着物ばかりぢやありませんね

其の願髻から其の口髭までも見違へて了ひますよ……」

連れの男は自分の姿を鏡に映して得意さうに言つた。

「口に皺を寄せてる所は、君にも解るだらう。唇の形を變へて見せた所が、頗る巧いものぢやないか……」

フアンドールは打笑つた。

「そして又其處でお爺さんらしく見えるんですね……ジューヴさん、僕はさう云ふお姿を見た事がありませんものでしたから……」

自分の名を呼ばれると、伴れの男はびくりとした。

「僕の名を言つちや不可、此處ぢや僕はポールつて名なんだ、此の家ぢや馴染なんだからね……」

實際ジューヴなんて名を此處所で口にしては大變であらう。

あの有名なランベル家の事件以後、あの「犯罪王」の大事件以後、ジューヴ探偵の名は巴里中に響き渡つて、知らない人のない位有名になつてゐたのである。で、ジューヴ探偵が、どのやうな大膽な事にも手慣れてゐる此の名探偵が、今も尚ほ重大事件に従事して、不可思議な調査に携はつて、今してゐる様に變装してゐるのが可いと思つたとすれば、不用意な言葉で自分の本體を曝露するやうな危険に遭遇したい爲めでないのは勿論の事であらう。

フアンドールも夫れを知つてゐた、で直ぐ、

「さあ早く、僕等二人だけのうちに、奈何云ふ譯で其處變装をなすつたのか、早く仰有つて下さい。誰を探してゐらつしやるのです？ 複雑した事件ですか

調査ですか？ 貴方の消息を長い間聞きませんでした。が、フアントマに關係した事ではありませんか？……」

ジューヴは肩を揺つた。

「フアントマの事なんぞは打遣いておき給へ。暫時言はぬ事にしておこう……いやね、僕が今日探偵してゐるのは、もつと通俗的な事件なんだよ。一時間前に君に出會ふやうな事がなければ、何もおもちや函をひつくり返して、君を引き止めるんぢやなかつたのさ。」

併しジューヴがいくら否認しても、フアンドールも名探訪である。探偵が本當の事を言つてゐるのでない事は、疾くより見抜いてゐたのである。

「通俗的な事件です！ それなら貴方が其麼變装なんぞをなさるものですか……さあ、僕だけには隠さないで下さいよ、何だか話して下さいよ……」

ジューヴは相手が餘り熱心なので、思はずほゝ笑んだ。

「君は相變らずだなあ！ 探偵問題の事になると夢中だね……夢中になつて了つ

て、奈何する事も出来なくなつて了ふんだね……フアンドール君、僕が奈何して君に物事を隠す理由があるものか。聞きたきや、此れを讀んで見給へ、解るか

ら。」
彼は靴から一枚の汚れた紙を取り出した。それには拙い筆蹟で曲りなりに文字が記してあつた。

フアンドールは一目見て了解した。

「貴方はルバールの關係してゐる事件を、(通俗的な事件)だと仰有るのですか？」

「どうも。」

「本當にあのカルレと云ふ綽名のあるルバールが關係してゐるんですね？」

「彼奴自身がね……」

「去年巡査を殺さうとし、且つツルデイヌ街で押入強盜を犯した悪漢でせう？」

「君は裁判所の書類のやうによく覚えてゐるんだね……」

「さうですか、それでは僕は通俗的な事件では無いと思ひます？……」

と言ひさして暫時考へてから、

「例へば、貴方が何時もの聰明に似ず、現行を押へさせようとする醜業婦などの告發を、奈何して信用なさるんですか？……」

「僕は其麼ものなんかちつとも信用してはゐないよ。警察が醜業婦などから教へられるやうな事のないのは、ね、フアンドール君、君も今讀んだ其の手紙のやうな告發で、復讐をしようとする女などから教へられるやうな事のないのはつまり警察が一大結果に到達するやうな事のないのは、君も知らなくはないだらう！」

「さう仰有ると頼母しいねえ。」

そして探偵が口を噤むと、フアンドールは非常に自然的な調子で、避け難い眞實を斷定するやうに言ひ添へた。

「勿論僕もついて行ますよ……」

「それや不可！」

「何故？」

「此の事件では、君と協同してやる理由が無いからさ……」

「だつて僕が好きですもの……」

「危険だよ……」

「それだけの理由ですか！」

「フアンドール君、君はひどく熱中してゐるんだね？……」

「僕は巴里人でも、ブルターニュ人の様に執拗ですよ！……」

ジューヴは稍躊躇してゐたが、フアンドールは徹底的の論據を見つけ出した。「僕の伴れて行く行かないで、二時間も考へてゐるなんて無駄な事です。許して下さらなければ、許して下さらなくつても好いんです！……僕を伴れて行く事がお嫌なら、かうして出會した以上跟いて来るなど仰有つたつて聞きませんよ……僕は貴方の後を尾行けて行くばかりです、従つて……」

「何だつて君は其處に危険を犯したがるんだい？あのルパールなど云ふ奴は、黙つて捕縛されるやうな奴でない事は、君だつてよく知つてゐるだらうに？」
フアンドールは微笑した。

「ルパールの事が正確に解つてゐるんですか？」

「あゝ、大抵は解つてゐるのだ。彼奴の態度の奇怪な點から見ても、彼奴が本

當に首を入れてる事は確かなんだ。今も君は無頼漢だと言つたが、警察でも彼奴は注意人物なのだけれど、如何なる人物か確實に断定する事の出来ぬ程、曖昧な奴なのだ……彼奴が大事件中に這入つてゐる事だけは解つてゐるけれど、何時もいざと云ふ場合になると、巧みに法網を逃れて了ふのだ。訴へるにも訴へる事が出来なくなつて了ふのだ。何をして生活してゐるのか、誰もそれを知つてゐる者は無い。悪漢團に入つてゐるのか？……兎も角彼奴が悪人である事は明らかなんだ……何事をも恐れず、又吾々から逃れようとする時には、拳銃を使ふ事すら躊躇しない奴なのだ……」

「さうです、仰有る通りです。僕もさう思つてゐます……彼奴が捕縛されるとなれば、頗る面白い新聞種が出来ようと思ひますよ……」
ジューヴは打笑つた。

「フアンドール君、フアンドール君、君は何時も眞剣になれぬ男だね！…あつと言はせるやうな記事が書きたいので、此處事件に首を突込まうと言ふのだね…君の生活には既にもう充分波瀾があつたぢやないか…」

探偵はさう言ひながらフアンドールに思ひ遣のある視線を投げた。ジューヴは此の青年記者が犯罪王の怪事件に連坐して、腕き苦しんでゐた時の事を知つてゐた。

フアンドールと云ふのは假の名なのである。

併し青年記者には別段感慨があるやうな風もなかつた。

「何を言つてらつしやるんです、ジューヴさん？ 事件が面白ければ、何も其の危険の程度を計ることは要りませんよ。貴方がルパールを逮捕しようと思つてらつしやれば、好かれ悪かれ、それに身命を賭してやれば好いのです…決

して油断してはなりませんけれど、危険な事を云々してそれに遅れたくはありません。所で、貴方の計畫は如何なんです？ ルパールの現行犯を取押へようと思つてゐらつしやるんでせうね？…」

「あゝ是非とも！」

「それで彼奴を狙つてゐらつしやるんですね？」

「その通り。」

「何時仕事にかゝるんですか？」

ジューヴは手で其の言葉を押へて、黙つて聞けと云ふ合圖をした。

「フアンドール君、あの帳場臺の所で飲んでゐる男の歌つてゐる聲が聞えるかい？」

「え、ブルス・ブルーの歌でせう？」

「あれが君の質問に對する僕の返答だ。間も無くルパールを尾行けて行くが、さうく、君は武器の支度はあるのかい？」

今度はフアンドールが苦笑した。

「銃獵禁止違犯だと仰有れやしませんか？」

「莫迦な！」

「それぢやべっ・ブrowning君が一挺ポケットにあります。」

「よし、それぢや僕の言ふ事を聞いてる給へ。ルパールは今朝市場にゐた、二三の手懸りでそれを知つたから、刑事に尾行させたのだ。刑事等もそれを推察して、一步も彼奴を放さなかつたのだ。僕の先見と受取つた報告から推して考へるに、ルパールは今しがたシャトーダン十字街を通り、其れからピカール廣場の方へ、醫師シャレツクの邸宅の方へ行くらしい。其處でシャトーダン十字

街で押へようと思ふのだ。

「無論吾々は一緒にゐるのぢやない。彼奴の姿を見たら、君は彼奴と同じ位の歩度で、彼奴の歩いてゐる道を、振返らないで先へ行くのだ。彼奴が後から來るか奈何か見たかつたら、體を斜めにして、後を斜めに見るやうに、商店の硝子に映して見るだけにし給へ。けれどもルパールが自分の後から續いて來ない事に氣がついても、其の道を歩いて行つて、横町のある所まで來たら、其の壁の角を曲つて暫時待つてゐるんだよ……」

「何故？」

「古めかしい策略なんだからね。ルパールが尾行される事を何とも思つてゐなくとも、又あゝ云ふ奴と云ふものは其塵事位平氣であるものなだけけれど、やはり何處かの店の前で立停つて、自分の前に行く奴が、誰かを探しながら戻つ

つて來やあしないかと思つて、窺つてゐるかも知れないと思ふからね。僕は君にそんな拙劣をやらせたくない……」

「承知しました。だが偶然してルパールの奴が見えなかつたら？」

「その時には……」と言ひかけて、探偵はふと口を噤んだ。

「オヤツ！ また一人お客がワルス・ブルーの歌を口笛で吹いてゐるよ。さあ出かける時刻だ！」

ジューヴは勘定を支拂つた。

「ねえ、此の店で口笛を吹いた人達は、警視廳の探偵でせう？」

「大違ひだ！」

「奈何して？ 貴方はあの歌を合圖の様にやつてゐらつしやるぢやありませんか？」

「うん：併し何にも合圖をしてるんぢやないよ！」

「え、訝しいなあ！」

ジューヴはニヤ／＼笑ふばかりであつた。

「なあに、心配する事はないよ？ あれや僕の策略なんだ……」

青年記者の不審さうな顔を面白がつて、ジューヴ探偵は尙ほかう説明した。

「併し君は今ルパールが出て來なかつたら奈何するんだと言つてゐたね……頗る簡短なものさ……其の時には歸つて來るばかりの事さ、そして通行人に耳を貸してみ給へ、ワルス・ブルーかジャンプ・アン・ポアを口笛で鳴すか、歌つて來るか、或は鼻唄でやつて來るかする奴に出會すから……其の通行人は、ルパールの後を見失はないように尾行して行く僕と、擦違つたばかりなんだ……」

「だから其の通行人は警視廳の探偵なんでせう！」

「なあに！……まあ待ち給へ……君は其の鼻唄を聞きながら街々を偵察しながら来ると、又其の鼻唄に出會す……そしたら早く歩き給へ、さうするとルパールと僕の行つた先へ来られるのだ。言葉を換えて言ふとプチー・ブーセの様に砂を撒く事が出来ないから、目印の代りに通行人の鼻唄を代用したわけなんだ……君はそれに従つてやつて来給へ……」

青年記者が驚いて茫然としてゐると、ジュエグは尙ほも説明した。

「その代り僕の方で其の行方を見失つたら、僕の爲めに其を砂を、つまりワルス・ブルーやジャンプ・アン・ボアを撒いておいてくれ給へ……」

「だつて僕は探偵を知らないんですもの……貴方に私の跡をつけて来られるように、其の二つの歌を唄ふやうに言ひつけるには、奈何したら好いのです？」

「探偵の事なんかは心配する事はないよ、僕は部下の探偵なぞありやしない。

僕が君の跡から行かなかつたら、僕の云ふ歌を其のまゝ歌ふか口笛に吹いて貰へば好いのだ。君に頼むのはそれだけの事だよ……あ、もう一つ言ふ事がある君が見咎められないで、ルパールを先にやらうと思つたら、道を横切らうか奈何しようかと云ふ體で、道傍に立止るだけで好いのだよ。それや警察業から得られた経験なんだ。さう云ふ風に立停つたものゝ顔は、見られるやうな事は無いのだからね……」

かう話をしながら新聞記者と探偵とは漸くシャトーダンの四辻に来た。ジュエグは一眼で其の四邊を偵察して了つた。

「それでは別れよう。君はノートル・ダム・ド・ロレットあたりでぶらぶらしてゐ給へ。六時だ……もう十分するかしないうちに、ルパールがあゝの酒場から出て来る。此處からでも右手に見えるだらう……彼奴の顔は直ぐ解る、背が高くて

左頬に創のある男だ。それではしつかりやつてくれ給へ：所でまだ一つ、僕等は双方知らぬ體なんだせ、ルパールがシャツレツクの家へ這入つて、僕が合圖をするのを待つてゐてくれ給へ……』

フアンドールは五六歩歩きかけたが、ふと戻つて來た。

『ジューヴさん！』

『フアンドール君！』

『お願いですから、教へて下さいよ。氣懸りで仕方がありません、やり損ねやしないかと思つて心配です……』

『何が？』

『警官でないのに、其の人達が何故ワルス・ブルーやジャンプ・アン・ボアを唄ふんです？』

ジューヴは微笑を泛べた。

『子供臭いね君も！ 實に簡短な事ぢやないか！ ね、ワルス・ブルーもジャンプ・アン・ボアも評判の唄だらう、流行唄なんだ。だから君の周圍にある人のうちで、少くも數人の人に其の歌を歌はせようとするなら、群集の中で口笛に吹くか、鼻唄に歌へば澤山なのだ：今朝ルパールのゐる酒場の前に土方を二人監視させておいたのだ：無論偵察者なんだせ。その二人がルパールの這入る所を見た時に、僕の言ひつけておいた歌をうたつたんだ。所がその二人に出會つた通行人に出會つて見ると、二人から聞いた歌を、口笛に吹いてゐたのだ：機械的な心理作用なんだよ。』

フアンドールは面白く思つて笑つた。彼は道を横切つて、指定せられたノートル・ダーム・ド・ロレットの監視點の方へ行つた。

三、帷の蔭

フロシヨ一長屋の半圓を描いて立つてゐる其の上の方、コンドルセ街に通ずる所にアンリイ・モニエ街がある。長屋は蔓草の絡みついた格子門よりも高い石垣で圍まれてゐた。南側に家々の立並んでゐる其の長屋の本道は公有地ではないので、其の入口の右手の門番小屋が如何にも私有地らしく思はせてゐる。

夕方七時頃であつた。静かに暮れた春の日の夕、フアンドールは其の長屋の十字街に來た。

彼は一時間ばかり前から、悪漢ルパールの跡を一生懸命に跟け廻してゐた。フアンドールの役目は實際複雑な役目では無かつた。探偵に教へて貰つてゐ

るので、容易に夫れと解る悪漢は、モンマルトルの酒場を出るが否や狙はれてゐたのである。ルパールは少しも屈托したらしい顔もせず、手をポケットに突込み口に巻煙草を啣へて、家々を見廻りながら悠々とマルチール街を登つて行つた。

フアンドールはクロゼール街の角で彼を追越した。それ以來彼を見放さなかつた。

一方ジューヴ探偵の方は奈何したか、青年記者の慧眼を以てしても終に見失つて了つたのである。

フアンドールが間を隔て、ルパールの先に立つて跟けて行くと、丁度フロシヨ一長屋にさしかゝつた時である、突然叫声がしたので彼は後を振り返つてたみ。フアンドールが本能的に後へ退つた時、ルパールの方でも其の叫声を聞くと

同じく後へ引返して行つた。

三四人の人が道傍にかたまつて、腰を屈めて何やら頻りに探してゐる模様である。

巴里では何事にも忽ち人集りがする。フアンドールが其の人達の傍へ行つた時には、早や通りがりの人が三十人程もたかつてゐた。奈何して人集りがするのかが推察するに難くは無い。誰か何かを落した位の事であらう。

話の様子で見ると、二十法金貨を一つ溝の中へ落したと云ふ事がフアンドールに解つた。また僅か二十スウ銀貨を落したのだと言つてゐる人もあつた。人々の中では嘲弄的な洒落が交されてゐた。巴里人と云ふものは事毎に洒落を言ひたがるものなのだ。

道傍の溝に蹲んでゐる一人の貧乏人が、手の汚れるのも構はず、頻りと泥の

中を探つてゐた。

フアンドールが群集の一番前に押出されて殆ど其の男と擦れ合はんばかりになると、ジューヴ探偵の聲で小聲にかう言ふのが耳に入つた。

「馬鹿だね、長屋の中へ這入つちや不可ないよ!……!」

溝の中で金を探してゐた男は、ジューヴ探偵に外ならなかつたのである。

フアンドールは狼狽して、奈何返事をしようかと考へた。するとジューヴは群集を追除ける小言や吐きを止めて唯一人残つてゐるフアンドールに向つて、早口に言つた。

「打遣つといつて、入口を見張つてゐたまへ!」

「だつて見失つて了ふではありませんか?……!」

「大丈夫! 醫者の家は右側の二軒目なんだ……!」

ジューヴとフアンドールとは沈黙した。ルパールが後で窺つてゐる様に思はれたのである、けれども心配は要らなかつた。悪漢は一寸群集に近寄つて來たが、直ぐ離れて長屋の方へ志して行つた。

ジューヴ探偵は言葉を嗣いだ。

「長くて十五分間ばかりは并クトル・マツセ街二十七番地にゐるから來てくれ給へ。」

「それでルパールがまだ長屋の中にもたら？……」

「その時は直ぐに來てくれ給へ……」

フアンドールは早や立去らうとした。するとジューヴはぶつ／＼言つてゐたが、やがて大聲に言ひかけた。

「有難うムいます、旦那様。それ程のお情があつたら、後生ですからもつと何

か頂かして下さいませ。」

フアンドールが再び此の即席乞食に近寄ると、探偵は尙ほかう言つた。

「何處へ行くのかと尋ねられたら、裝飾畫家のオルナエイユの家へ行くと言ふのだ。」

「何階です？」

「夫れは知らんが登つて行けば僕が階段に立つてゐるから。」

暫時すると人集りも散つて了つて、後には巡查が唯一人残つてゐた。例の通り何事だらうと思つてやつて來たが、時遅れで何があつたのか解らなかつた。

ジェローム・フアンドールはジューヴ探偵の指揮を正確に實行した。

フアンドールは道路係の小屋の後に身を潜めて、フロシヨール長屋の右側の二軒目の家を見張つてゐたが、別段其の附近には變つた事もなかつた。ルパール

の姿は何處へ行つたのか見當らなかつたけれど、遠く行きはしない筈である。

十五分するとフアンドールは自分の番所を離れて、言はれた通りにギクトル・

マツセ街二十七番地へやつて行つた。

彼が四階迄登り切ると、ジューヴの聲が聞えた。

「君かい?……」

「僕です……」

「受附で何とも言やあしなかつたかい?……」

「誰もおまませんでした。」

「それは好かつた。此處へ上つて來給へ。」

探偵は五階と六階の階段の上立つて、窓を細目に開けて、眼に双眼鏡を當

て、其の下に展開されるパノラマを仔細に見守つてゐるのであつた。

フアンドールは其の傍へ行つて見てジューヴの目的が解つた。ギクトル・マツセ街の其の家の階段の窓からは、フロシヨール長屋の全景を一望の下に集める事が出來たのである。此の長屋を成してゐる小さな家々は、一つく明瞭に分立してゐたので、其の長屋の狀勢は上から一眼で觀察する事が出來た。

「奴め這入らなかつたね?」とジューヴが尋ねた。

「え、僕の見張つてゐた間は這入りませんでした。それから奈何しましたか……」

「それからだつて、彼奴がやつて來れば、僕の眼に見えた筈だ。巴里を好く知つてゐて、到る處に友達を作つておくと却々役に立つものだよ。僕は、此處から見張つてゐれば、ルパールの行動を一々手に取る如く見る事の出來るのを、ふつと思ひついたので。それに彼奴に裏を搔かれる憂も無いんだからね。だつて

フアンドール君、君は長屋の中迄奴を跟けて行つて大失敗をする所だつたぢやあないか。』

『さうでした。』

『其處で引返させる爲に早速一芝居仕組んでみたのさ、だがね……訝……訝……』
 ジユヴーは更に兩眼鏡でちつと外を見下した。太陽は早や傾いたが長屋の中にある事は判然と見る事が出来た。彼は機械的にフアンドールの肩に手をかけた。

フアンドールは急に身を震はせた。ジユヴーはそれを押へた。

『鳥が網にかゝるぞ、見えるかね、フアンドール君？』

青年記者は非常に驚いて眼瞬きして、眉を蹙めた。彼も早や見慣れてゐる一箇の人影が本道と醫師シヤレツクの家建物を隔てゝある庭内へ、頗る平然

として忍び込もうとするのが見えたのである。

『見給へ、彼奴と同じ高さの處にゐようものなら、庭と道との間にある籬が少くも一二間の高さがあるから、彼奴が何をするか見えやあしないよ。』

『でも此處からなら。』とフアンドールは益々熱中して呟いた。

ジユヴーは向ふの様子を話しながら、

『此處からならルパールの奴が玄關の前にある踏段の方へ、右の方へやつて行つて、それから引返して來るのが見える……ねえ、引返して來るぢやないか？……』

『さうですね。』

『そら、垣の中に隠れてゐる扉口へ走つて行く。畜生！ 其の扉口は何處にあるんだらう？ それが解らなくちや不可。をや、ポケットを探つてゐるな……』

ふむ、用意周到だな、合鍵の束だ：合鍵と泥棒：あの錠を開ける鍵が無ければ大變だぞ：其處で、』とジューヴは得意さうな微笑を泛べてフアンドールを眺めながら言つた。『そこで君に何と言つたつけ？……』

事實フアンドールはルパールが扉口から忍び込んで、地下室に入り、それから扉を鎖めるのを見た。

『さてこれからは？』と彼は尋ねた。

『これからは網を張つて、棕鳥を捕るんだ！』

と大きな音のするもの構はず、階段を馳下りながらジューヴ探偵は答へた。

ジューヴ探偵は用心深くフアンドールに言つた。

『僕が長屋の門番にシャレツクさんはゐるかと言つて尋ねると、門番は屹度ゐ

ないと云ふ、と云ふのは僕が聞き合して見た所、シャレツクは二日前から旅行してゐるのださうだ、だから其の隙に君は門番の注意を惹かないように、僕の後から長屋の中へ忍び込むのだ。僕の方は、ゐないと云ふ返答を聞くとコンドルセを引返すやうな振をする：それからは僕一人の仕事だ。』

ジューヴ探偵の計畫はあらゆる點に於て實現された。フアンドールは忍び込んだ、探偵は愛想の好い様子で門番の女に尋ねかけた。

門番は彼の問にかう答へた。

『さあ奈何ですかねえ。昨日旅行鞆を持つてお出かけになつたつきり、まだお歸りにならないようですから、多分おゐでなさるまいと思ひますけれど、見に行らつしやりたければ、右側の二軒目の家なんですよ……』

『いゝえ、歸つて、また二三日したら参りませう。』ジューヴ探偵は醫師の家に

行くやうな風を少しも顔に表はさず、門番に送られて門口迄出て来たが其の時ふと門番に注意した。

『お氣をおつけなさいよ、お内儀さん、ランプが燻つてゐるやうですよ……』
 として門番がランプを直してゐる暇に、探偵は右手へ出るのを、足音を盗んで左手の方へ飛び出して、シャレツクの家角に立つてゐるフアンドールに追ひついた。

其の時分から日はごつぶり暮れ果てたし、長屋内にはまだ瓦斯も灯されてなかつたので、一層暗くなつてゐた。

『奈何しませう？』とフアンドールが尋ねた。

『構ふ事は無いから、中へ這入つて行つて隠れてゐよう。時間は丁度好い。お詭向の暗さぢやないか。もう直きに灯も入る事だらう。』

フアンドールは微笑したが、早くもシャレツク醫師の庭に添つてゐる木柵の方へ進んで行つた。其の柵は都合好くルパールが開けておいてくれたのであるが其の時ジュエヴは彼を引止めた。

『一寸待ち給へ？ 攻撃を始める前に、先づ戦闘計畫を立て、おかう。』
 フアンドールは茫然としてゐた。

『勿論君は大將になつた事は無い。僕も矢張りさうだ……けれど僕はいろく細かな事を知つてゐる。』

さう言ふと眞面目になつて、探偵は更に言葉を嗣いだ。

『あのジョゼフィンと云ふ女があの家の間取を書いて來た。情夫から其の書類を盗取つたのでなければ、多分其れを知つてゐたのだらう。ねえ、階下の玄關の此方側と向ふ側とに窓が二つある。昔風な食堂と客間、二階の右手の窓は明

らかに寢室の窓なんだ。左手の露臺のある窓は——ジューヴはファンドールに其の窓を指して——あれが事務室の窓なんだ！ 僕等の目懸けねばならぬのはあの部屋なんだ。解つたね、ファンドール君？」

「青年記者は無用な言葉を言ふのを好まなかつた。

『宜しい！』と彼は口の中で呟いた。

壁に寄添ひながら、木蔭などを利用して、芝生の足音の立たぬのを擇み、息を殺して一足毎に立寄りながら、用心しいく前へ進んで行つた。悪漢を現行犯で押へようとすれば、相手に姿を見られないようにするのは勿論の事、少しでも怪しい物音を立て、敵に疑懼の念を抱かせてはならない。見咎められずに事務所へ行き得たならば、先づ確實に舞臺へ現はれた事になる。

醫師シャレットクの家の一階は、地面からさう高くはなつてゐなかつた。ジュー

ヴとファンドールとは樋を傳つて難なく露臺の上に攀登つた。と突然暗い穴の前に立つた。其處が事務室なのである！

『此奴は巧いぞ！ 窓が開け放してある。泥棒の方にも都合が好ければ、探偵の方にも矢張り都合が好いや！』とジューヴ探偵は呟いた。

『両方に同じ事てなかつたら奈何でせう！』とファンドールが冗談のやうに呟いた。

けれどもジューヴは其の暗中につつと飛込んだ。と自分の靴が床板に軋んだのでひやりとした。

彼はファンドールを引止めて、ポケットから護謨を一對取出した。

『僕は忍び靴をつける：君は濟まないが靴を脱いでくれ給へ……』

そこで二人は室内を音をも立てず歩く事が出来るようになった。ジューヴは

餘り前へ深入するのを避けて、窓の扉の脇金の廻り工合を見て、軋まぬ事を確かめると、窓錠を押して、帷を引いた。

『冒険だ！ かうしておけば外からはもう見られなくなるから中でとつくり見る事にしよう。』

ジューヴはポケットから懐中電燈を取り出して、部屋の中で方角を定むる事の出来るだけに照らして見た。

其の事務室はかなり瀟洒な飾付がしてあつた。部屋の中程には書類の積み重ねてあるテーブルが備へつけてあつた。其のテーブルの右手、窓と向ひ合つてある角に、天鵝絨の帷の蔭に隠れて、階段口に出る扉があつた。其の扉の正面に角形の長椅子があつて、二枚の鏡板を占めてゐた。本棚は壁の全面を掩つてゐて、其處此處には静かな午睡を誘ふやうに立派な安樂椅子が並べてあつた。

『ですけどジューヴさん、あの手紙に書いてあつた例の金庫が見えませんか？……。』

ジューヴは憐れむやうな微笑を泛べて、青年記者の耳許に口を寄せた。

『それや君が好い眼を持つてないからだよ。探偵眼と言ひたいね。家に莫大な金目なものを持つてゐて、つけ狙はれてゐる人は、當世では時代遅れのお役所や、道具を飾り立て、客を嚇かさうとする商店の様に、其麼流行遅れの函などへ藏つておきはしないよ。』

『御覽の通り何にもありはしない！』

『だがね、凸凹して現代的な、藝術的な線を描いてゐる高價な木製の棚を背負つてゐる角のあの長椅子をよく見給へ。少し厚く、又は非常に厚く膨れてゐる此の場所が、聰明な人物の注意を惹くやうな事はなからうかね？ 蓋の脆い桃』

花心木の板の下に頑丈な鋼鐵製の戸棚があるのだ。君の右手にある其の列形が雑作無くいざけられるのだ……」

ジュエヴはさう言ふと、言葉に所作を添へて、板を弄つて、驚いたフアン

ールに眼に見えぬやうな錠を示した。
「そらね、此處から鍵をさし込むのだ。かう言へばもう其の後は君にも解るだらう……とこゝろで愚圖々々してはゐられない。此の燈火がどうも不用心だ……併しもう少し此の中を探偵しなければならぬ。」

フアンは頭を振り揚げた。

「それでは燈火を消して帷の蔭に隠れよう。幸ひと窓から大分離れてゐるから僕等のゐる事に氣が付きはすまい。」

一時間許りの間二人は動きもしなかつたけれど、懸て立つてゐるのに疲れて來たので、其の場へ蹲んで了つた。ジュエヴは膝頭へ顔を當て、むづと拳銃を握り締めてゐた。フアンは探偵のやうに身構へて例のベ・ブ・ウニングと名づけてゐる奴を、ポケットから出した所で差支へないと考へた。

折しも遠くの時計が十時を打ち出した。と其の時突然二人のちつと燈してゐる耳許に微かな音が聞えた。

「好く見えるか?」とジュエヴが太い聲で尋ねる。

「えい。」とフアンは答へる……

青年記者と探偵とは待つてゐる暇に小刀で襖へ遠くからでは見えぬ程の小さな穴を穿けておいたので、其處へ眼を當てると部屋の中の事を見る事が出來た

のである。

物音は静かに緩やかに續いた。大して音を立てるでもなく、又身を潜めようとするでも無く、誰だか隣室を歩いてゐた。

明らかに悪漢ルパールはシャレツクの留守宅に唯一人ゐる事と思つてゐるのであらう。彼は久しく渴望してゐた金庫から思ひの儘に悠々と盗み出せる事だと思つてゐたのである。

足音は近づいた。フアンドールは何時もの勇氣には似ず、ジュエヴ探偵に盲目的に信頼してゐるのにも似ず、心臓のどきどきするのを感じた。と其の時扉の把手を廻す者があつた。階段と此の事務室とを通じてゐる扉が開いて、誰だか其の部屋の中へ這入つて來た。

一瞬間静まり返つてゐた。と突然部屋が明るくなつた。這入つて來た男は電

燈のスキツチを見付けたのである。

其の所作はてきばきしてゐた。二人の探偵は強盜が寸時も躊躇する事の無いのを見ると、此の家の勝手を熟知してゐるに違ひないと思つた。が帷の穴から見守りながら二人は慄然とするのを禁じ得なかつた。

フアンドールは自分の手の傍にあつたジュエヴの手をむづと握り締めた。ジュエヴも緊乎と握り返した。事務室に入來つた男はルパールではなかつたのである！

見知らぬ男は静かにテーブルに近寄つて來て、吸取紙の上に載つてゐた新聞を悠々と取り上げると、注意深く読み始めて、面白い條には線を引いたり、頭を傾かしたり、額に皺を寄せたり、眼を瞬いたりした。

其の男は年の頃四十歳位にもならう。赤茶色の願髯を扇形に念入に撫でつけ

て、額は非常に禿げ上つてゐた。鼻は非常に彎曲して、鼻眼鏡がかゝつてゐた。時計が十時半を指してゐるのを見ると、彼はふと立上つて、襟飾を取り、チヨッキの釦を外しながら、又戻つて来る事が解つてゐるやうに部屋の燈火を灯け放したまゝ出て行つた。

其の男が出て行くか行かないのに

『奈何だい？』とジューヴ探偵が小聲で言つた。

フアンドールにも其の言葉の意味が解つたので、同じく小聲に、

『あれはシャルレックでせう？』と言つた。

『さうだ、紛れも無くさうなんだ。訝しいなあ！ 事件がこんがらかつて来たよ。僕等は物品財寶を盗まれないようにと思つてかうして待つてゐたのだ、だが之では人命も保護してやらなければならぬ事になつて来たね？』

フアンドールは黙つて聞いてゐた。ジューヴは更に言葉を續けた。

『詰らぬ事になつたものだ。あの醫者の奴め家を留守にしておけなくなつたんだらう……』

『いつその事斷乎姿を出した方が好くはありませんか？』

『僕もさう思ふ。だがね、あの男を驚かしてやるも好いが、ルパールに見られて手を焼くやうな事になるとねえ。白状するとね、フアンドール君、彼奴の巧んだ悪事を首尾好く見現してやりたくてならないのだ……それにまだジョゼフインから言つて来た女と云ふのがある。其の女はどう云ふ女だらう？ それが全く解らないよ、まだ秘密になつてゐるのだから！』

ジューヴは再び沈黙した。フアンドールは探偵を見ないでも、彼が不時の問題に心を散らさうとせぬ程に、瞑想に耽つてゐる事を推察した。

事實ジューヴ探偵は心の底で鋭敏な官能を働かして熟考してゐた、數週間に來自分の心の中に簇り起つてゐた諸問題を回想した。實際は先づ眞先にシャルックの家に来て、家内でどんな事があるのか見て、それから外へ出て此の家を探つた方が好かつたのだ。けれども、此れでは待伏せてゐたルパールは疾つくの昔歸つて了つたので、全然敗北であつた。其處で事件は滑稽な局を結び、ジューヴは敗られた勇士となり、萬事終り矣と云ふ事になつて了ふ！

あの奇怪極まるルパールも——ジューヴはかう考へた時、其の行方は久しく杳として知られないが、彼をあの忘れも遣らぬ怪盜フロントマと同視しようとした——尾行され、感づかれ、搜索されてゐる事を感じたので、屹度姿を瞞まして、逃げて了つたのかも知れない！

尙ほ又、ジューヴはシャルックの家の外では、彼を投獄させるか、或は少く

も監禁するのに、何等の根據も得られないと思つたのであらう。何となれば此の巴里のドン底の無頼漢たるルパールの巧妙な力は、大凡常に不審で疑はしいと云ふだけに止まつてゐて、決して明瞭に犯罪者となつて現はれる事が無いからである。

ジューヴはシャルックを保護すると云ふ最初の義侠的な考に戻つて、かう思ひ乍ら心の亂れを押鎮めた。

『併し醫者が此處へ戻つて来る、それは確かな事だ……そこで此の事を言はずに彼を保護してやらう。今の處其の方が好きさうだ。』

事實シャルックは十分ばかりすると事務室に戻つて来て、手早く身仕舞をした後、薄青い縞の寝巻を着たまゝ、またテーブルの前にゆつたりと腰をかけた。時間は過ぎて行つた。

煖爐棚に飾つてある時計が三時を報じた時、フアンドールは心配してはゐたものゝ、思はず大きな欠伸を堪へる事が出来なかつた。夜は長かつた。利益も無ければ、變化も無かつた。それでもフアンドールとジュエヴとは尙ほシャレツクを帷の蔭から見守つてゐた。

一體此の男は何時眠るのだらう？ かうして徹宵仕事をする癖なんだらうか？

醫師の顔には少しも疲労の様が無い。美しい扇形の髯を撫しながら、自分の前に積重ねてある多くの書類を點検して行つた。煙草を吸つた。フアンドールは様々な思ひに耽つてゐながらも、愛煙家のジュエヴ探偵が、鼻先を煙草の芳香に見舞はれたが、女神ニコチン嬢に身を捧げる事の叶はぬのを、どんなに口惜しく思つてゐる事だらうと考へて、微笑せずにはゐられなかつた。

ジュエヴとフアンドールとは無性に苦しくなつて來た、時間が際限も無く長い様に思はれて來た。二人は唯かうして身動きもせずにある事の肉體的な苦痛ばかりでは無く、絶間も無い心遣ひと、當然起るべくして起らざる何事かの事件を待つ心との苦しみに責苛なまれた。

其の間にシャレツクは一通の手紙を書いて、蠟燭を灯すと、其の焰で封蠟を融かした。それから、宵の中から仔細に閲してゐたいろ／＼な書類を並べ出した。それから尙ほ二十分間もすると、漸くシャレツクは仕事を終へて、さてこれから寢につかうとするやうな風で、蠟燭や電燈を消して部屋から出て行つた……。

部屋はすつから暗くはなつて了はなかつた。西に向つて、早や東雲の仄白い

光がさし入つてゐた。もう三十分すれば、ジューヴとフアンドールの影法師が薄い帷に透けて映る事であらう。さすれば部屋の中から彼等二人の立つてゐるのが解るのだ。

醫師は確かに部屋へ戻つて行つた。

尙ほ暫時、探偵と新聞記者とはちつと耳を澄してゐた。東雲の静けさを破るやうな音は何にも聞えて來なかつた。

實に必死の時であつた！

ジューヴとフアンドールとは力も終に盡きて了ひさうに思つた。必要の爲めに強ひて身動きもしないでゐたためにが、つかりして了つた。脚は棒のやうに突張つて、背骨は折れる様に痛かつた。

「うゝむ！」と唸りながらジューヴ探偵はやつとこさと立上つた。するとフア

ンドールも同じく大息嗣いで立上つた。それ程彼は疲れ切つてゐた。

「これから奈何しませう？」とフアンドールが先づ口を開いて尋ねた。

「黙つて聞いてゐる給へ！」と突然ジューヴはフアンドールの脰を突いて注意した。

更に前のは違つた物音が聞えて來た。靜かに平然として歩く人の足音では無かつた。何だか譯の解らぬさらくと摺れるやうな音である。其の音は止んだかと思ふと、また聞えて、聞えたかと思ふとまた止んだ、何處から其の音が響いて來るのだらう？ 何處からでも無い。四方八方から聞えて來るのだ……

「此の部屋は悉皆布張りだ。他の部屋も之と同じ事だと思ふ。それが爲めに音が遮切られるばかりでは無く、音が變化して聞えるのだ。それで其の音の性質も、何處であるかと云ふ事も、確實に掴む事が出來ないのだよ……。」

『まるで……。』
 と言ひかけてフアンドールは口を噤んだ。扉が再び開かれた。スイッチが捻られると、部屋は再び煌々と明るくなつた。醫師シヤレツクがまた入つて來たのである。

シヤレツクは寢に就くや、今の妙な物音に驚いて、急いで起きて來たのであらう。

シヤレツクもぐるりと部屋を見廻して、机を手早く調べた。そして二三歩窓の方へ進み出た。帷の蔭に隠れてゐたジューヴとフアンドールとは、彼の近寄つて來るのを見ると、はつと思つて膽を冷した。

實際二人は、シヤレツクが手に拳銃を擱んで來るのを見たのである。偶然彼が二人の男を見つけたなら奈何なる事であらう？ 屹度正當防衛だと思つて拳

銃を放つ事であらう！ ジューヴはフアンドールの腕をむづと擱んだ。フアンドールも顫へはしなかつた。

併しシヤレツクはそれで引返した。此の方は少しも怪しく思はれなかつたのだらう。而も彼が部屋を調べてゐると又もやコト／＼と云ふ音がした。何の音だか判断する事の出來ない音だ。けれども階段の方から響いて來るらしく思はれた。シヤレツクは扉を開け放したまゝ出て行つた。明るさの度が強くなつたので、ジューヴとフアンドールとはシヤレツクが他の部屋々々の明りを次々に灯してゐるのだなと思つた。すると物音はたと止んだ。スイッチを切る掠れた音と共に明りは次第に消えて行つた。家々を見廻つたけれど、シヤレツクは終に何等怪しい點を見なかつたのだ。

ジューヴとフアンドールとは幸ひに其の暫時の隙に、痺れた手足を弛める事

を得た。

青年記者は探偵のする通りに、又もや床の上に蹲まつて、尙ほも帷と窓との間に潜んでゐた。

ジューヴは言葉短かにフアンドールに言つた。

『出来るだけ平つたくなつてゐよう。シャレツクが戻つて来て、僕等を見つけて発砲しても、向ふは本能的に僕等の頭の高さの所を狙つて打つから、弾丸は僕等の上を飛んで行くからね。』

フアンドールは探偵の言葉に幾らか戦いたが、それでも其の言葉を至當だと思つた。其れに立つてゐるよりか床板の上に臥てゐる方が樂でもあると思つた。探偵と記者とは、シャレツクが自分の部屋に戻つて行つて、扉を閉す音を聞いても、尙ほ一時間ばかりの間はぢつと身動きもしなかつた。

けれども日が益々上つて來た。

もうさうしてもゐられなくなつて來た。もう少しすれば長屋の人達が起きるのだ。少くとも明方の明るい中を行けば、見咎められずに通り過ぎる事は出来なからう。

彼等は早速決心した。

眼で相談し合つた後、ジューヴは靜かに立上りながら、

『野營を徹する事にしよう。』

でフアンドールは用心に用心して窓錠を捻つた。そして露臺に出ようとして細目に開けた。

ジューヴは早速鬢や髯を取り、變装を捨てた後、悪漢のやうに一目散に逃駈つて、ピガール廣場の真中へ來た。

四、女の慘屍體

「今度の事件は失敗だつたねえ……」とジューヴは何時もの平然たる態度で言つた。

……ジューヴ探偵よりも血氣に富んで平然たり得ぬフアンドールには、諦らめがつかなくなつた。夜は長かつたけれども、未曾有の捕物をするのだと思つて待つてゐた。然るに今憐れにも此の新探訪に大失敗して歸るのである。

ジューヴがピガール街を曲つて、親しげに青年記者の腕と腕とを組み合はせた時、フアンドールはかう尋ねた。

「要するに僕が言つた通りでせう。あのジョゼフィンと云ふ女の告口はたゞ想像だけの事なんですよ。何の根據も無いんですよ……。」

「馬鹿な事を言つてゐる……。」

「だつて僕等がちやんと見張つてゐたのに、彼奴は確かに來なかつたではありませんか、何にも起らなかつたてはありませんか……。」

ジューヴは立停つて、青年記者を態と嚇すやうに人指指を擧げた。

「フアンドール君！ 君の云ふ事は僕には解らないよ。君の批評眼は何處についてゐるんたい？ 僕がもう長い間教へ込んだ探偵學を何うしちやつたんだ？

僕等がちやんと見張つてゐたと君は言つたね？……さうだよ……勿論の事だ

よ、けれどもルパールがやつて來なかつた……ねえ君、ジョゼフィンの手紙で、明らかに教へられてゐる點が二つある事を忘れちゃ不可。一つはあの女の情人たるルパールはシャレツクの家へ屢々出入すると云ふ事だ。一つはシャレツクの金庫を破らうとしてゐる事だ。第一の點はいろ／＼な事で證明されてゐ

る。彼奴が何故金庫を破らなかつたか、不審だ。けれども奴の意志がさうで無かつたと云ふ事を證據立てるものは何も無いと思ふ。』

「すると貴方は、彼ルバールが計畫を實行する事が出来なかつたと仰有るんですか？」

ジューヴは例の癖で、明瞭に答へる事を避けた。

「かう云ふ場合には種々な假定を立て、考へてみなければならぬから、早まつた結論をしないようにしなくちやならないよ。ルバールは來るべき筈であつて來た。泥棒をすべき筈であつて、泥棒しなかつた……此れが僕等の知つた事實だらう。吾々が信じてゐたやうに、巴里にゐないと思つてゐたシャレックがゐた、めに、ルバールは犯罪を遂行する事が出来なかつたのであらうか？……吾々が尾行してゐたのに氣がついたのであらうか？……彼奴の後からあの家に

入込み、又事務室の窓の帷の蔭に隠れてゐる事に氣がついたのであらうか？……成程確かに有りさうな事だ！ それからまたシャレックが其の夜丁度事務室に來た、そして物音が聞えたやうな風をしてゐたらう。あの醫者が都合の悪い時に來たものだから、ルバールが仕事を止めたのだと思ふ譯には行かないだらうか？」

フアンドールは黙つてゐたが、ジューヴを顧みて、ピガール街を走りながら手眞似をしつゝ、自分等の方へ來る三人の男を指した。

「あれや何でせうね？」

「酔漢だよ……夜が明けたばかりだからね……」とジューヴは答へようとしたが、其の時ふと思ひ當る事があつたので、

「だが待てよ……」と呟いた。

三人の男は彼等二人の十間程手前へ來ると足を緩めた。すると其の中の一人が息咳切りながら言ひかけた。

「如何でした、探偵長？」

「やあ、君か、ミシエル君。それからアンリイ君にレオン君だね……」

それからフアンドールの方を振返つて、

「別働隊の三探偵だ……」と教へた。

するとミシエル探偵が尙ほ繰返して尋ねかけた。

「如何でした、探偵長、何かありましたか？」

「何、何かあつたつて？ 何かあつたかとは奈何云ふ事なんだい？」

「フロシヨウ長屋へ行つてゐらつしやつたんでせう？」

突如に圖星を指されたのでジュエーヴはすつかり面喰つて、口の中で何やらぶ

つゝ、呟いたが、やがて、

「いや、いちめないでくれ給へ。君等は何處から來たんだい？ 警視廳からかい？」

「いゝえ、第九警察署からです。」

「それで僕等がフロシヨウ長屋にゐた事が奈何して解つたんだい」

ミシエルは妙な顔をした。

「だつて貴方に此處で會ふのも……あの事件の爲めで……。」

「奈何云ふ事件？……濟まないがはつきり言つてくれ給へ……。」

ミシエル探偵は呆れ顔にジュエーヴ探偵長を眺めた。すると探偵長も變な顔をしてまた尋ねた。

「ねえ、ミシエル君、君はどの事件の事を言ふのだい？ 僕は何にも知らない

よ……。」

『さうですか、かう云ふ譯なんですよ、探偵長……今朝ローシユフコールの警察署で、一網張らねばならぬ事でレオンとアンリイと僕とが三人で執務してゐたのですよ。すると、二十分程前の事、丁度出發する時迄寢ようとしてゐた時です、電話の鈴が鳴るものですから、僕が受話器を取つて聞いてみたのですよ……しますとね、とぎれぐの、息詰つた喘ぎ喘ぎの女の聲で、確かに警察署かと尋ねるものですから、僕が確かにさうだと答へると、「人殺しです！ 妾は殺されます！」と叫んで……助けに来てくれと言ふのですよ……。」

『それで？』

『それで、何處へ行けば好いのかと尋ねたのです。所が都合悪く電話が切れて了ひましたものですから……。」

『調査したんだね？』

『はい。すると十五分ばかりして、警察へ電話をかけたのは一人だけで、其の番號は九二八一―一二と云ふ電話で、持主はフロシヨウ長屋のシャレツクと云ふ醫者だと云ふ返事だつたのです……。」

『一體此れは奈何したんだらう？』とフアンドールが叫んだ。

ミシエルは見知らぬ此の青年新聞記者をちらと見造つて、更に言葉を嗣いだ。『交換手の話に依ると、通話を申出た人の聲は息苦しうな、異様な震聲だつたと言ふ事です……。」

『それで君は九二八一―一二を呼び出して聞直してみたらうね？』

『誰も電話へ出る者がありませんでした。』

『其處でかうしてやつて來たのだね？』

『はい。』

ジューヴ探偵が默然として沈思してゐると、ミシエル探偵は恐々言つた。
 『急いで行かなければならないと思ひますが……若しも本當に犯罪が行はれたと
 すると……。』

けれどもジューヴ探偵長は少しも急ぐやうな氣色が無いので、彼は大いに驚
 いた。ミシエル探偵は口の中で解らぬ事を呟いたが、ふとフアンドールを一寸
 傍へ伴れて行つて、

『今の話がお解りになりましたか？』と突如に問ひかけた。

『ちつとも解りません。僕等はフロシヨール長屋にゐたんですから、何かあつた
 ら聞えたらうと思ひますがねえ？……』

『さうですなあ……ですが電話がかゝつたのですからねえ。』

『兎も角見に行く事にしませう？……』

『さうだ、見に行かなくちやならない。』とジューヴも言つた。『だがねフアンド
 ール君、何故だか知らぬが、別段好い事も無さうな氣がするよ……君は今も
 待伏の話をしたけれど、……今にして思ふと遂々！……』

ジューヴはミシエル探偵を手招きした。

『人数が餘り多過ぎる。世間の人の注意を惹くのは餘計な事だ。ミシエル君、
 君だけ一緒に來て、アンリイ、レオンの兩君は警察へ歸つて、必要な場合には
 何時でも來られるようにしてゐてくれ給へ。』

二名の探偵と一名の新聞記者とは、事件の事に心を吸はれて、言葉も無くピ
 ガール街を急足に登つて行つた。

ミシエル探偵はジューヴ探偵長が何故妙な躊躇をしたのかと思つてゐた。ジ

ユーヴとフアンドールとは自分等の携はつた此の奇怪な事件を驚かぬ譯には行かなかつた。

シャレツクの家の門前迄來ると、三人は立停つた。

『呼鈴を押してみよう！』とジューヴが言つた。

呼鈴を押してまだ深く眠つてゐる家を訪れてみたが、家の中では誰も起出づる氣勢が無かつた。ジューヴは苛立つて『ウ、！』と唸つた。

そして更に呼鈴の鈴を押して、激しく鳴らし立てた。

今度は誰かしら大急ぎで降りて來た。そして扉越しにむつかしい惶てた聲で尋ねかけた。

『誰方ですか？ 何御用です？』

『開けて下さい……。』

けれども此處早朝の客來に驚いた此の家の人は、扉を開けるところか、門をさして尙ほ尋ねかけた。

『誰に御用ですか？』

『シャレツクさんに！』と答へたジューヴは手取早く事をしようと思つたので

『さあ開けて下さい。警察の者です……』と言ひ添へた。

『警察？ へえ、私に何の御用ですか？』

『それはお話致しますが、外で喋る事も出来ませんから、まあお開け下さい！』とミシエル探偵が答へた。『何が貴方、悪者だつたら此處に音なんぞ立てやしませんよ。』

探偵の言葉に漸く納得したと見えて、シャレツクも扉を細目に開けて見る事にした。

『併し私に何の御用がおりますか？』

ジュエツは直ぐ其の譯を話した。

『悪漢がお宅に入つてゐるらしいのですよ。電話がかゝつて来たものですから出張つたやうな次第です……。』

此れを聞いて驚いたシャルレックは、あらかた服を着けてゐて、扉を開けると二三歩後へ退つた。

『悪者が？…私には悪い夢でも見てゐるのかな？…がまあ、どうぞお入り下さい……。』

三人は應接室に入つた。

『人殺しですつて？…全體誰を殺したんです？…此の家には私一人きりなんです……。』

其の言葉は實際だつた。ジュエツとフアンドールとシミエルとは呆然として顔を見合した。

奇怪不思議な事件に慣れてゐるジュエツが先づ第一に氣を取り直した。

『間誤々々しちやゐられませんよ、シャルレックさん…實に奇怪な事ですけど其の話は後で詳しくお話する事として先づ第一にお宅をすつかり調べる事が肝要です……。』

そしてジュエツは細心に急いで言ひ添へた。

『僕等が怪しい者で無い事は御承知下さるでせうね？』
シャルレックは打笑つた。

『え、〜、ジュエツさんのお顔は好く存じて居りますもの、お言葉に背く事は出来は致しませんよ……ですがね、ジュエツさん、貴方は屹度思ひ違へてゐら』

つしやるんでせう。併し兎も角お奴な様にお調べ下さい。御案内致しませう……。」

シヤレツクの案内でジュエヴとフアンドールとミシエルとは先づ階下の間毎々々を調べたけれど、何にも怪しいものは無かつたので、二階へ登つて行つた。『調べは直ぐつきますよ、二階は三間しかありませんからね。浴室に寢室に書齋があるばかりですから……。』

フアンドールはきと唇を咬んで、『而も其の書齋で私達が夜明をしたんですから。』と言はふとしたが、折好くジュエヴが口を出した。

『浴室を見せて頂きませう？……。』
浴室は直ちに探査せられた。探偵達が其の部屋を出て階段口に戻つた時、シヤレツク醫師は更に一室の扉を開いた。

『書齋です。』と言ひながら探偵達を入らせた。

フアンドールがつひ今しがた迄ジュエヴ探偵と二人で逃げ出した其の書齋に一步足を踏入れるが否や、あつと許りに驚いた。

『や、ッ！ 大變だ！……。』

彼の背後にゐたジュエヴとミシエルとシヤレツクとは驚いて蹣跚めいた。其の部屋は散々に取亂されてゐたのである……。

椅子が顛覆つてゐるのを見ても猛烈な争闘のあつた事が推察せられた。テーブルの桃花心木の板が、足で蹴られた爲めであらう、一枚見事に折れてゐた窓帷は引き千切られて吊下つてゐた。暖爐迄半分壊れてゐた。

絨緞の上には窓からテーブルの所迄糸を引いて、血汐が點々と散つてゐるのが、一眼でフアンドールの眼に映じた……尙ほ前へ進み出て見ると、其のテ

ルの傍に、無惨にも血塗れになつて、動きもやらぬ女の體が横はつてゐるのに眼がついた。

フアンドールは一跳びに其の横はつてゐる女の傍へ馳け寄つた……
彼は女の心臓に手を當てたり、耳を當てたりしたが、落膽した調子で

『死んでゐる！』と言つた。

彼が掲げた女の腕は絨緞の上へ音を立て、ぱつたり落ちた……

『死んでから随分になります。もう冷めたくなつてゐます！……既に硬直してゐます……』

ジューヴは言葉短かに命じた。

『誰も入れないように、誰も動かないように！』

探偵長は驚天動地底の事件をも、解り切つた當然の事のやうに思はせる才能

を持つてゐた。

一同は驚きの爲めに聲も無く顛へてゐたが、彼は靜かに部屋の中を調査した。

『電話機が顛覆つてゐる……被害者と加害者とが争つたんだな……ふむ、犯罪

目的は竊盜か……』

『竊盜ですつて？』シャレックが一步前へ進み出て言つた。

『竊盜です、此れを御覽なさい、金庫が破られて顛覆つてゐます、中の物に手がついてゐますよ……』

シャレックが其の金庫の傍へ飛んで行つて大聲に何か喋つてゐる間に、ジューヴとフアンドールとミシエルとは女の屍體を丁寧に抱き起した。

『奈何して此の女は殺されたのでせう？』とフアンドールは、其の屍體には、全身に唯一ヶ所恐しい傷があるだけなのを見て言つた。多くの打撲傷があるだ

け、それだけ殴り殺されたやうに思はれたのである。

ジューヴは何とも言はなかつた。

彼は眼前に展開された物凄い光景を打眺めて、深く考に沈んでゐるやうであつた。

『想像にも及ばない！』とファンドールは呟いたが、聽て醫者を呼んだ。

『シャレックさん：氣を静めて一つお話を願ひます：貴方は此の事に何か思當るやうな事でも無いませうか？……』

シャレックは何時も貴重品を入れておく鼠色の袋が空になつて床の上に投げ出されてゐるのを拾ひ揚げて、機械的に引裂いてゐた。

其の顔驚愕の爲めに眞蒼になつてゐた。

『心當りなぞは何にもありません！』：物音さへも聞えませんでした！……そ

れに此の女は何です？ 私は見も知りません！』

暫時屍體を改めてゐたファンドールは、ジューヴを引張つて、部屋の片隅に轉がつてゐる小さな靴を指して、

『華奢ですよ。』と言つた。

ジューヴはシャレックの肩に両手をかけて尋ねた。

『女のお友達ですか、それとも戀人ですか、え？ 何も隠さなくつても好いでせう……。』

『隠す？ 何を隠すんです？ 私の仕業だと仰有るんですね？ 私は此處事少

しも知りません：而も御覽の通り物まで盗まれてゐるのです……。』

『貴方の情人では無いんですか？』

『いゝえ、見も知りません……。』

『得意客でも無いんですか?……』

『療治した事はありません。』

『それでは來客ですか?……』

『今日は一人も來客はありません……。』

『貴方の家の女中でもありませんね?』

『ありません。此の家にあるのは私一人だけです!……』

フアンドールが横かる口を入れた。

『ねえシャレツクさん、お宅の扉は締めてあつたんでせう。そして此の婦人は幽霊のやうにお宅へ這入つて來たのでもありません。そして貴方が此處に此の婦人のゐられる事を知らないとする、此れを解釋する事を得るのは唯一つし

かありませんね。つまり此の婦人は晝間のうちにお宅へ忍び込んで來て、貴方に見付からぬやうに此處に隠れてゐたんですね……。』

『でも私には誰も來客はありませんと言ふのに、今日は誰にも會ひません!……此の婦人を見た事ありません!……』

『顔を好く見て下さい!』とジューヴが注意した。

・ 醫者は屍體の顔を見ると更に顔を蒼くした。

『此れは酷い! 貴方も御覽なさい、ジューヴさん、此の顔は焼けて、相好が變つて、見極めがつきませんよ……。』

『探偵長、此れを御覽になりましたか?』

と言つてミシエル探偵が、一枚の手巾を差出した。其れには薄黒い粘着性したものが、厚い層を爲してくつついてゐた。

『此れは全體何だらう？』とフアンドールが呟いた。

けれどもジューヴ探偵は一目見て其の物の性質を覺つた。

『松脂だ、犯人は殺人後被害者の顔が解らぬように、松脂を包んだ手巾を塗りつけたのだ。此れで顔の焼けてゐる説明がつく、けれども此の女が奈何して死んだかと云ふ説明にはならない。又何故シヤレックさんの家で殺されてゐるのかと云ふ譯も、此の女が誰であるかと云ふ事も解らない？』

かう小声に言ひながらフアンドールを顧みて、ジューヴ探偵は言ひ添へた。

『就中何時奈何して此の犯罪が行はれたかと云ふ事が解らない。僕等が此處を出てから一時間にもなるとはしないのに、此の金庫を破るだけだつて一時間以上はかゝるんだが！』

一同は暫時黙然としてゐた。

フアンドールは驚愕を顔に現はしてゐるシヤレックを機械的に凝視してゐた。ジューヴは沈思してゐた。此の犯罪の秘密も知らず、ジューヴとフアンドールとが此の部屋で徹宵した事も知らぬミシエルのみは、平然たるものであつた。彼はジューヴ探偵の袖を引張つて小声で言つた。

『此の醫者を捕縛致しませうか？』

ジューヴが驚いて暫時返事するのを躊躇つてゐると、獨り合點して醫者に打向つた。

『さあ、話なんぞは澤山だ。本當の事を言ひ給へ！……』

『本當の事！』と醫者は跳り上つた。

『さうだ、白を切るなんぞ澤山だと言ふのだ、此の犯罪の次第を言ひ給へ！』
『だつて私は何にも知らないんですから！……』

「それだ！ 君は此處に唯一人で住んでゐると言ふ、此の女を知らぬと云ふ、此の事件を與り知らぬと云ふ……が其麼事は無駄な事だ、其麼遁辭は兒戯に等しい……白狀しろ！……」

部下が訊問してゐる間、ジュエヴは一言も言はず、頭を垂れて深く熟考してゐるらしい様子であつた。

「だつて私は本當の事を言つてゐるんですよ！」とシャルレックは唸り……言譯した。

「それで何にも聞えなかつたのか？ 何にも……此處から一二間しか離れてゐない所に居りながら……」とミシエルは激しく追窮した。

「はあ、何にも聞えませんでした！ ですが、昨夜は夜遅く迄此の部屋で仕事を居りました……それから寢に行きました……勿論怪しい事には氣がつかませ

ました……さう……、明方に物音がしたのを覺えて居ります……」

「ふむ！ ふむ！……」

「ですけれど些細な事です……私は起きて来て、家を見廻つて、此の部屋にも這入つて來ましたけれど、何にも見えませんでした……」

「ふむ、成程！」

「あゝ、證據が一つありますよ！ 私が此の部屋へ戻つて來た時、まだ此處に手紙の封をする爲めに、蠟燭と此の封蠟とを使ひました……それから寢につきましたもの、奈何して私に殺人などをする時間がありましたか……酷ですよ、貴方がたが呼鈴をお鳴しになつた時は、再び寢ようとした時なんです……此の机を離れてから二十分程にもなりませんか……」

シャルレックが本當の事を言つてゐるものなれば、犯罪の行はれる筈が無さゝ

うに思はれたので、益々確信を強めたミシエル探偵は更に追窮した。

『夫れが違つてゐると言ふのだ！…少くとも此の人殺の物音が君に聞えないと云ふ筈が無い！…君は嘘を吐いてゐるのだ！…』

そして彼はジューヴ探偵の方を振返つて、

『捕縛致しませうか？』と今度は高い聲で言つた。

『本當の話だよ？…本當の話に違ひないのだ！…』とジューヴは悼むやうに緩やかに言つた。

探偵の言葉を聞いたシャレツクは、漸く少し平靜に恢復した。

『ね、さうでせう！ 私が本當の事を言つてゐるやうに思はれるでせう？…私を助けて下さい、此の怪事件から私を救出して下さい？』

ジューヴは返答をしなかつた。

彼はフアンドールを眺めて、奈何したら好からうかと打案じてゐた。シャレツクはぼつり、と時間を費した事を話し出した。彼の言つた事は事實ジューヴもフアンドールも見てゐたのであつた。

『夢を見てゐるんぢやないかしら？』とフアンドールは呟いた。

ジューヴは大股に部屋を横切つて行つた。彼は窓際へ行つて帷を押分けて、フアンドールに板の上の泥を指して見せた。其處は丁度二人が蹲んでゐた所であつたのだ！

するとジューヴが躊躇してゐるので、其の愚圖々々してゐる譯の解らなかつたミシエルは

『警察も手温くなつたものだ！ 失敗をしたり、無罪者を捕へたりする事を怖がつてゐた日には、一步だつて踏出せやしない、何事にも手出しする事が出来』

はしない！……」など、口小言を言ひ始めた。

「事を取早く片附ける爲めに、彼は尙ほジューヴに言ひかけた。

『奈何致しませう探偵長？……』

ジューヴは返事もしないで、唯肩を揺つたばかりであつた。

『シヤレツクさん、どうか今朝は御外出なさらないようお願いいたします。私はこれから警視廳へ行つて、人體鑑定課員に来て貰ふ様に頼んで來ます。此の部屋の様子を詳しく寫真に取る必要がありまするし、私も又詳しく調査しに戻つて參りますから、貴方にゐて頂かねばなりません……ミシエル君はシヤレツクさんの意に従つて、此處に残つてゐてくれ給へ！……好うムんすね、シヤレツクさん？……』

……さう云ふとジューヴ探偵は別段挨拶をするでも無く、放心して了つたやう

にフアンドールを引き連れて、階段を降つて此の不思議な家を辭し去つた。

彼は辻馬車を呼んで青年記者を乗せて、馭者に行先を言ひながら、フアンドールと顔を見合せながら額を拭つた。

『何から何迄奇怪だね。あの殺人事件には、フアントマに價するやうな怪秘密が潜んでゐるよ。』

五、ルパールの激怒

ルパールは店頭で涼んでゐる藥劑師の氣のつかぬ様に其の前を通り過ぎたが一寸躊躇らつた後、氣を變へて後戻りした。

「如何ですね、エランさん？」

「有難う：貴方は？」

「まあぼつ／＼やつてゐます：時にエランさん、家の奴がお宅へ來やあしませんでしたか？」

藥劑師は一寸考へた。多分心の中でルパールルパールの女房と云ふのは誰の事だらうと考へてゐたのだらう。それから其の人が來たか奈何か考へて見た。

「ジョゼフィンさんですか？」

「え、……。」

「ゐらつしやいませんでしたよ、だが——お悪ければ参りませうか……。」

ルパールは即座にそれを遮切つた。
「さう言つた譯ではありませんや、彼奴が好いか悪いか其塵事は知りませんがね、なかに、悪いやうな事はありますまいよ。あれの事を言つたのは：通りがりの話のきつかけと言ふものでさあ：は、貴方がたにかゝつちや堪りませんねえ……。」

其の儘ふいと引返して行くのに驚いてゐる藥劑師を後にして、肩を揺りながら町を横切つて五六歩行くと、彼は（悪漢の巢窟）の前に立停つた。

ツールーシユ婆がテーブルの上にビゴルノー（貝の名）の大きな籠を控へて、店頭店頭に頑張つてゐた。

「食べてみないかえ？」と老婆はルパールを見るとかう言つた。そして其の言葉**葉**を強くする爲めに愛想笑をして見せた。

「針を貸しとくれ。」

ルパールは暫時の中に十ばかり貝を空にした。

「ごうだえ、甘いかえ？」

ルパールは無頓着に肩を揺つた。

「あゝ、うめえよ……。」

ツールーシユ婆は暫時ルパールを見守つてゐた。彼の機嫌は悪くないらしかつた。話さうと思つてゐる事を話すのに丁度都合の好い時であつた。

「ルパールさん！……。」

「何だい、婆さん！」

「一寸耳をお貸しよ。話す事があるんだからさ。人に聞かれたつて差問へない事なんだよ。」

「何の話だい？」

ツールーシユ婆は妙な様子をした。

「何でもないよ……實はね……。」

老婆は急に黙つて了つたのに苛立つてルパールは催促した

「さあ言はないかよ！……早く……。」

けれどもツールーシユ婆はそれには返答をせず立上ると、合圖をした。

ルパールは振り返つて見て笑ひ出した。

「おゝ、自動車が来やあがつたな！」

實際一人の甍の大急ぎでやつて来て、貝の入つてゐる青色の皿の載せてある

籠の間へ、勢込んで這入つて来た。

此の壁はサン・マチュエー廣場の坂を風のやうに馳け下つて来るので、此の近所では自動車と云ふ綽名がついてゐた。人の話に依ると元は鐵道の機關手であつたが、或る事故の爲めに兩脚を折られて了つたと云ふ事である。今は救護所に收容せられて、世間の情や、自分で出来る仕事をさせて貰つた駄賃で漸く露命を繋いでゐた。

自動車は幾らかにありつかうと思つて、ルパールの方へ胼胝だらけの手をさし出した。

『自動車、一寸の間用事があるから、其の間此の牡蠣の番をしてゐておくれ。』
ルパールは老婆に跟いて行つて、コルンの店から二三間離れてゐる庭の奥の

暗い階下へ這入つて行つた。ツールーシユ婆は季節の間此の家の前で店を開いてゐるのである。

ツールーシユの家は物置場であつた。這入つて行くのも難儀なら、出て来る時も一通りの骨折では無かつた。あらゆる種類の盜賊共から集められた種々雑多なものがごたくと積み重ねてあつた。

ツールーシユ婆は扉を締めるが否や、早速話にかゝつた。

『エルネスチンが怒つてゐるよ、お前さんにさ、あの人はね、お前さんに……。』
『嚇かしなら構ふ事ア無いやな……勘定をつけてやらあ！……』
けれどもツールーシユ婆は他にもまだ話の論據があつたので、べらぐと喋り立てた。

エルネスチンは争ふ事を好まなかつた。彼女はルパールがずつと強いのだか

ら、或る程度迄自分が負ける事を好く知つてゐた。けれども昨夜のやうに此の(悪漢の巢窟)を追出されて、顔に泥を塗られた事が、口惜しくて腹が立つた。而も何の譯も無しに追出されたのが口惜しかつたのである。

『譯も無いんだと！ それぢやエルネスチンは工兵やノネと仲間になつてゐるんだ？』とルパールはやつと横槍を入れる隙を見て言つた。

ツールーシユ婆が返答しないのを見ると、ルパールは益々激した。

『俺はそれが氣に入らねえんだ！ エルネスチンの阿魔奴、彼魔奴等と二時間以上もごたごたやつてゐた事を考へて見るが好いや、彼奴等は探偵なんだぜ。』

ツールーシユ婆は跳り上つた。

『工兵が？ 其麼事があるものか。』

『探偵だと言ふに。警視廳の奴等なんだ！』

贓品買の老婆は戦いた。記憶の中を探つて、今ルパールが其の假面を剥いだあの男達の前で、餘り喋り過ぎはしなかつたかと考へた。

あゝ、餘計な事を言つたか奈何か、老婆は少しも覺えが無かつた。婆は天を仰いで、

『あゝ解らぬものだ、さう言やあ眞面目な人間らしかつたて！』と青息した。

けれどもツールーシユは何時迄も夫れを氣にかけてくよくよしてはゐられなかつた。

それに當面の用事はエルネスチンを許してやつて貰ふばかりでは無く、コルの酒場へ頭を高くして這入られるようにして貰ふ事であつた。

老婆はエルネスチンに限つて彼魔犬共に内通するやうな女では無い、だからあれを信用してやつてくれと頼んだ。

贓品買の老婆はルパールが知らぬ顔をして黙つてゐるので、益々熱心にエルネスチンの辯解をした。

彼は部屋の中を機械的に行つたり來たりして、老婆の店の品物を見廻してゐたが、やがて金屬製のネクタイピンの頭についてゐる一箇のキラ／＼光る石にきつと眼をつけた。

ルパールはエルネスチンの事は其方のけにして尋ねかけた。

『婆さん、是は何處から手に入れたんだい？』

老婆は怪訝な眼付をした。

『觸つちや不可ないよ、預かりものなんだから。』

『へえ、まだ賣れないものなんだね！』

『あゝ、此處ちや世帯道具のやうなものゝお客はあるけれど、贅澤物は……。』

『さあ、手を打たうせ？……』

彼は粗略にポケットから二十法金貨を一つ摘まみ出して、老婆の手に握らせ、そして石入のピンを服の裏に刺し止めた。其のピンの價値は彼の聰明な鑑識に外れはしなかつた。

『お前さん、私の言つた事は知らぬ顔かい？』

ルパールは早や門口迄出て行つて打笑つた。

『まあさうさね……だがねエルネスチンに俺が嫌だと言つてたと言つとくれ。』

ルパールが炭屋町を五六歩歩みかけた時、シャルトル街の四辻で、折柄降つて來る一人の通行人に突當つた。ルパールは其の男の鼻先を押へた。

それから直ちに立停つた男の肩に兩手をかけて、笑ひながらつと耳許に口を寄せて、

『おい、バルビユ？ 自分で自分の姿が見えないのかい？ 奈何したんだえ、おい、早速寫眞屋へ行つて來るが好いや！……』

成程口髯も無く、赤ら顔の、赤い頬髯の其の顔付を、數字組の親分として無頼漢達の特種な社會に知られてゐる男の顔を見つけるには、眼力が強くなければなるまい。彼がバルビユと云ふ綽名を持つてゐる通り、頬にも唇にも殆ど顔中全部を掩ひ盡してゐる長い縮れ毛が生えてゐた。それがすつかり顔を綺麗に剃つてルパールの前に現はれたのである。而も彼は髪の褐色な男だつたので赤くなつてゐたのである。

かうして見現はされると驚き呆れたバルビユは本能的に近所の硝子に視線を投げて自分の姿を見成つた。緑色を帯びたソフト帽を冠り、大き過ぎる程の辨慶縞の服を着た姿が成程滑稽であつた。

『だつてお前はアメリカ風に作れと言つたらう？……』

ルパールは肩を揺つたが、眞面目な態度で、

『どうも仕様の無い男だなあ！ 尤も俺は下車の都合の好いようにしろとは言つたさ。それだのにお前はジョクリツス風な服装をしてゐるぢやないか、其塵事を少しでもすれや、俺達が妙に思はれるのは知れた事だよ。頭へ砲口を向けて、警察に俺達の後を尾行けて來いと言ふよりもつと馬鹿な眞似さ！……すつかり着更へて、も少しおとなしく見えるようにしなよ。』

バルビユは當惑して踵を廻らせた。するとルパールがそれを呼び返した。

『所であのミ、イユは？』

『あゝ、一緒にやつて來るよ。』

『それや無論承知してゐらあ。なあおい、鐵道の一件には、彼奴に學生の古着

を着せてやつてくれ……」

『あいよ。』

彼が再び行きかけると、ルパールは尙ほそれを引留めた。

『まあお待ちよ、まるで後から火に追はれてゐるやうだなあ。例の事は何時の事だつたつけ？』

『トヌリエの取消が來なけれや、土曜日と日曜日との間の夜よ。』

ルパールはちらと眼を走らせて人が聞いてゐるはすまいかと思つて見廻した。そして自分の手下の耳許に口を寄せて、

『解り易いかい？』

バルビユが怪訝な顔をしてゐるので、ルパールはそれに言ひ足した。

『なによ、俺の爲に尋ねるんぢや無いんだよ。小僧達の爲めなんだ。彼奴等は

彼處に行くのだらう？』

『間違ふやうな事はあるまいよ。色が淺黒くて、大抵薄黒い服を着てゐて、それから片眼なんだ……』

『馬鹿！ 眼が一つしか無けれや、もう後を言ふ必要は無いやね、其の點だけで澤山だい。』

ルパールは尙ほバルビユの腕を指で押へた。

『皆んな一等だよ……』

『何人あるんだね……』

『五六人だ……』

『女達ともで？』

『いや、俺の奴だけだ……なに厭がるやうな事は無いと思つてゐて好いよ！』さ

う云つてルパールはバルビユに別れた。

彼はバルビユに別れると、尙ほ手下の變な服装ををかしがつて笑を消しも敢なかつたが、向側に巡查のゐるのに氣がついたので、道を横切つて、恭しく其の巡查の傍へ寄つて行つた。

『今日は、お巡りさん……私をお覚えはムいせんか？』

巡查が思ひつかぬ様子なので、ルパールは更に言ひ添へた。

『先夜貴方に伴れて行つて頂いた者ですよ……ほら檢舉の晩……炭屋街で……私が家へ歸る時でした……其の節はごうも有難うムいました……』

さう言つたなり返事をも聞かず彼は歩みを續けた。巡查の思惑なんぞは奈何でも好かつたのだ。それから間も無く彼はグット・ドール街の二軒目の家の前で立停つた。小綺麗な相當の家で、階段には絨緞などが敷いてあつた。

ルパールは其の家へ入つて行つて、門番部屋を通りがかりに、

『ジョゼフインの部屋へ通ります……』と言つた。

女差配は暫時の間變な眼付で彼を見送つてゐたが、やがて瓦斯屋の男としかけてゐた管々しい相談をまた始めた。

六階へ登ると二度正面の扉を叩いたが、何の返事も無いので苛立つて來た。

彼はジョゼフインを此處に遅く迄寢させておくのが嫌だつた。自分が女を見に來た時には、何時でも直ぐと扉を開けなくつちや不可と言つてゐた。

ルパールはもう六ヶ月程前からジョゼフインと出來てゐた。此の女はベル井ルの貴金屬仕上工で、彼の可愛がつてゐる情人で、郊外の舞踏會で知合になつたものである。

其處へ出入する男や女達の中で、ジョゼフインがルパールには愛嬌があつて

純真で、心を惹きつけた、で彼の浮浪仲間より、精神も外觀も僅しか高くない此の花を手折るに躊躇しなかつたのである。

ジョゼフインの方でも此の男の態度には少しも不満は無かつた。男から時とすると盲目的な忍従を要求せられるけれども、かう云ふ種類の男の大部分の連中がするやうに、決して邪慳に取扱はれる事は無かつたからである。例へばジョゼフインが名譽心や良心の悩みを感じても、そもくルパールとの馴れ染めの最初から、その事に就いては諦らめて了つてゐたのである。

彼女も男が氣儘な生活をする爲めには、暴力の前にも、必要なら盜賊のみか夫れ以上の事の前にも決して恐れない事を知らないではなかつた。

ジョゼフインも他の方へ向つて行つたならば、恐らく普通の人間となれたらう？ けれどもいろいろな事情が夫れを許さなかつた。彼女は一團の親分の情

婦になつた、そして結局一種の自負の念を感じたが、其の爲めに悪弊に陥入る事も無く、彼女の生活のやうに不安な定まらぬ日を送つてゐる女達のやうに、卑俗な亂暴な悪風にも染まなかつたのである。

三度目には少し苛立つて來たルパールは、其の強い肩で扉を打破つた。

けれどジョゼフインの小綺麗な広い部屋は、巴里の美しいパノラマの見える大きな窓からさし入る日の光に浸されてゐるばかりで誰もゐなかつた。

ルパールは思はずオヤツと叫んだ。

『オヤ、此奴は訝しいぞ！』

屹度誰か近所の人の所へ行つてお喋りでもしてゐるのだらうと思つたので彼は大聲に呼んで見た。

『ジョゼフイン！…來てくれ！』

確かに扉を押破る音で、同じ六階にあつた部屋々々から、幾つか心配さうな顔が出た。

此の家では物音に慣れてゐた。喧嘩などには手を出す事は殆ど無かつた。けれども何事が起つたり、異様な騒ぎでも起ると、皆んな其の原因を聞かうとするのであつた。

幾人かの女達がルバールの聲に答へたが、ルバールの第一に眼についたのは七人の子供に惱まされて内職刺繍をして暮してゐるギノンと云ふ女で、ルバールが夜自分の情婦の所へ來てゐる時に、子供を泣かしやあがつたら窓を叩き破るぞと言つて嚇した事のある女であつた。

「ジョゼフインは何處へ行つたんだ？」とルバールは驚いてゐるギノンを見詰めた。めながら亂暴に尋ねた。

「だつて妾が知るものかね。ルバールさん、だけど昨夜貴方と夕食して歸つて來た時、腹心地が悪いと言つてゐましたよ。それからあの人に會ひませんがね。何でも此處から出て行つたと云ふ事です。」

「出て行つた？ 何處へ？……何時？……」とルバールは次第に怖氣づいてビクビクしてゐる女を睨みつけながら怒鳴つた。

「だつて妾ア知らないんですよ。知らないんですよ……ジュリイから聞いた事なんだもの……」

隣の窓口に赤い點の浮いた、髪を振亂した太つた顔が現はれた。

ジュリイはギノンのやうに臆病ではなかつた。朝から晩まで浸り込んでゐる暴飲の爲めに噎れた聲で、アルコールの煙に頭をまだ眞黒に煙らせてゐるにも拘はらず、明晰な記憶で説明した。

それは簡短な事であつた。彼女が夕方四時頃に歸つて來ると、ジョゼフインの部屋に呻き聲が聞えたので見に来て見ると、ジョゼフインが腕き苦しんでゐた、丁度……

ジュリイが途中で言ひ淀んだので、ルパールは

『丁度奈何したんだ？』と命令的な口調で尋ねた。

ジュリイは小聲に叫びた。

『丁度毒を飲んだやうに！』

女は亂れかゝつた髪の毛の間から平氣の皮で、殆ど唆かすやうな風付でルパールを見成つてゐた。

けれどもルパールは眼瞬きさへもしなかつた。

『それでお前は奈何したんだ？』

『何にもしやあしないよ、妾ア悠然と足を元へ返さうとしたのさ、何にも妾に關係した事ぢやあないからね、所がコケットがやつて來て其處へ入つたのさ、それから……』

『コケットが？ 彼奴は何處にゐる？ 直ぐ此處へ伴れて來てくれ！』

コケットは既に數分間前から、開きかゝつた扉の陰に身を潜めて立聞きしてゐた。彼女は此の廊下の奥に住んでゐて、ジョゼフインの部屋から一番離れてゐる部屋に入つてゐたのである。

もう見付けられないで濟まさうとしても駄目な事だと思つたコケットは、眼醒め際の萎びた見窄らしい姿を其の場へ現はした。其の寢巻から突き出てゐる皺だらけの憐れな喉、ゴツ／＼した骨ばつた顔の上には、夜の間玉のやうに固まつた化粧料がピカ／＼脂光りに光つてゐた。

コケツトは確かに五十の坂を越してゐた。恐れげもなくルパールの傍へ體の觸れ合はんばかりに近寄ると、チーズを塗つた腸詰を一切食ひ終つてルパールの鼻先へぶつと臭い息を吹きかけた。

『奈何したつてえの？ 妾ア自分のした事をしたんだよ。』と相手の惡黨面を見据ゑながら言つた。

ルパールは相手にしなかつた。

『ジョゼフインは何處にゐるんだ？』

『ラリポアズの二十二番室よ……知りたくば。』

一寸の間呆然としてゐたルパールは、やがて激怒して怒鳴りつけた。

あゝ！ 此の女共は何時も自分の關係の無い事に手出をするなどは悪い了見だ。何だつて餘計な事に、譯も解りもせぬ事におせつかいをするんだ？ 夜

中なんぞにジョゼフインを出してやるなんて？ 俺に、ルパールに聞きもしないで病院にやるなんて？ 詰らない真似をしやあがる！ 今病院に入られて堪るかい？……

『本當だよ、嘘ぢやないんだよ。』

ルパールは憤つて拳を振揚げて今や淫賣婦の婆の頸へ振卸さうとした、が其の時早く其處にゐた連中はけたましい悲鳴にびつくりさせられた。

『あれえ、助けて！ 人殺しい！』

驚いたギノンは自分の部屋へ逃げ込んで了つた。すると七人の子供達迄が彼女を取巻いてわいゝと泣き立てた。ジュリイもこつそり其場を逃げ出した。

其の時ルパールはふと心付いて、怒鳴りながら階段を馳け降りて行つた。

暫時して息咳切つてコルンの酒場迄馳けつけたルパールは亭主に專制的な計畫を言ひつけたが、コルンは矢張り落着いたものでそれに反対した。

『どうも仕方がありませんよ、今日は訪問日ではありませんからね、お前さんだつても明日の晝迄は病院に入られませんか。』

ルパールは苛々しながらも、亭主の言ふ通りなので黙つてゐると、亭主は小聲に叫びた。

『明日は晝から三時迄訪問時間だ……訪問は明日の事だせ……』と夫から彼は灰めかすやうに、『メレカツスだね、ルパールさん？』

『八釜しい、それよりか書くものをくれ！……』

ルパールは二三日前ジューヴ探偵に宛て、謎のやうな手紙を書き取らせた同じテーブルに向つて、それから悪筆で何か認めると、ツールーシユ婆の傍ら、

牡の籠や蝸牛の皿の間に蹲まつてゐる膝行者を呼んだ。

『自動車、大急ぎで此の手紙をラリボアズへ持つて行つてくれ、急いで行つて来てくれ、歸つて来たら駄賃をやるからな。』

壁が大急ぎに出た拍子に息を切らしながら、大聲に怒鳴つて来る號外賣に突當つてあはや顛覆されさうになつた。

『さあ都新聞 號外！……フロシヨウ長屋の大怪犯罪！……女殺し事件！……』

『おい、ルパールさん、號外を買つて見なよ。』と亭主が言つた。

『あゝ氣が違ひさうだ……俺には解つてゐるのだ！……』と彼は言放つた。

『え、ッ！ 奈何して？ もう知つてゐるのかい？』とルパールの言葉にコルンは其の場へ釘付にされて了つた。

六、脅 迫 状

ジューヴ探偵を案内した事務員が、部屋の中でしてゐる話を聞く事の出来ぬやうに出来てゐる羅紗張りの二重扉を畏まつて閉めるが否や、ラリボアジェール病院長 モーヒル氏は探偵に愛想の好い笑顔を向けた。

『恐れ入りました、ジューヴさん、』と病院長は今しがた警務課警視の出した名刺を弄りながら言つた。『實は今朝二三人探偵の方を派遣して下さるやうに警視廳へ願出ましたけれど、貴方のお名前を名指したのでは無いけません。手前の家のやうな平凡な事件に、貴方のやうな有名な方のお手を煩はさうとは少しも思つてゐなかつたのですよ。』

ジューヴはモーヒル氏の言つてくれる愛想の好い言葉やお世辭をば少しも有

難いとは思はなかつた。

彼はかう簡短に答へた。

『院長さん、私 共同僚や 私 などが毎朝報告と云ふものをしに警視廳へ歸ると云ふ事は、貴方も多分御承知だらうと思ひますが……』

『え、ですが……』

『まあお待ち下さい……すると今朝課長のアヴールさんが報告の時に私 共に貴方の手紙を読んで聞かされたのですよ。それには私 が一生懸命に探してゐる人物の事が書いてあつたんです。而も私 は不運にも二日前からその爲めに失敗してゐるんです。其の人物はカルレと云ふ綽名のあるルバールと云ふ浮浪漢です。これで貴方もお解りで無いませうが、貴方から彼奴の告訴があつた事を承はりましたものですから……』

「成る程、解りました。ですが貴方の部下の方でも一人送つて下されば好かつたのです?……」

「奈何致しまして。私自身で働く方が好いと思ひましたものですから……併し——ジューヴは其の言葉を言ふ時に傷つけられた感情を隠さなかつた——併し私も他の主務警視と同じ稱號で、警務課の主務警視たるに過ぎません、ですから私が自分の主張に服従しなければならぬやうに、常に自分の撰好みを没脚して、吾々に告發せられる人の御意志に添ふように致さなければならぬと思つてます。」

「奈何しまして、ジューヴさん、貴方の評判な事は……」

ジューヴは其のお世辭をもう一度遮切つた。

「併し奈何云ふ事件ですか?」

「それは今も申しました。平凡ではありますけれど、稍駭目的の奸計的事件です。貴方はラリボアジエールへおいでになつた事は……いませんか、ジューヴさん。」

「え、此の病院の部屋を幾つか知つては居りますけれど、全部見廻つた事はありません。」

「成程、ぢやかう想像してみして下さい、ジューヴさん。一昨日當病院の腕利の醫師パーテル博士の室に、早朝悪い食物の不消化の爲めでせう、激烈な胃痛に苦しんでゐる患者が一人來たのです……」

「それは其の博士の診斷だつたのですね?」

「え、それは此處へ來られた時に出た診斷なのです、其の診斷の確定せられたのはもつと後の事ですが、係りの醫師は其の婦人に入院許可をしたのです。」

入院の際姓名職業を聞いて見ると、巴里グット・ドール街の家具附の家に住んでゐて、ジョゼフィンと言ふ名で無職なのださうです。これ迄は別段變つた事はありませんでせう？」

『なる程、疑はしい點はありませんね。』

『すると入院後數時間経つと、つまり同じ日の朝の十一時頃ですが、其の婦人に手紙が一通來ました。其の手紙は使の者が持つて來ました、門番へ手紙に書いてある宛名の患者に、早速渡して貰ひたいと云ふのです。手前共の病院では最も親切を旨と致したいと考へて居ります。』と言つて院長は得意な微笑を泛べた。『私は院内の者に、かうした寂しい病院生活をしてゐる患者には、出來るだけ親切にしてあげなければならぬと、常々申付けて居ります。其處で手紙が來た。でその手紙を受取つた者は、其の朝パーテル病室に入院を許され

た其の患者へ早速持つて行つてやつたのですよ……』

院長は言葉を切つてテーブルの抽斗を開くと、其の中から拙ない文字の書いてある封筒を取り出してジュエヴに見せた。

『患者は其の時非常な發熱をして居りましたが、これを受取ると、其の時看護してゐた看護婦の注意を惹いた程に大いに驚いて裏を返して見たのです。患者は漸く其の封を切つて苦しげに手紙の内容を讀むと、突然恐怖した叫聲をあげて、眼をぎら／＼させながら、恐しく恐怖して床の中で起き上るのです。看護婦は其の手紙を取上げよとしましたが……患者は言ふ事を聞かない、そこで其の場へ馳けて來た助手に話すと、助手も其の手紙を讀まうと致しましたが……やはり患者は承知しないのです……』

院長は學者的に一寸口を噤んで、自分の話の效果を見た。ジュエヴは催促し

た。

『そしてそれから？』

『それから貴方、妙な事が起つたのですよ。其のジョゼフィンと云ふ娘は即刻退院して家へ歸りたいと言ひ出したのでせう！ 貴方にもお話致しました通り

其の患者は非常な熱だつたのですもの……退院などをさせたら、冥土へやるやうなものなんです。助手は言ひ聞かして退院票を断はつたのです、毎朝廻診した後でなければ病人を退院させられない規則だと言つて聞かしたのですが……どうも致方が無いのです！ 婦人は歸りたいと言つて、部屋中を騒がせ、而も世界にどんな權利を以てしても病人を病院に押込める法はないなど、言ふものですからね……致方が無いではありませんか？』

『成程。』

『助手はふと心附いて、私を呼びに寄りました！ そこで私も早速馳け付けて他の寢臺を離させ、皆んなを遠ざけて、私は貴方の友達だ、貴女の悪い様にはしない、今歸つたりなごしては實際貴方の命にも拘はるからと言つて、頻りに宥めました。一口に言へば巧く論じたのです、其處で其の患者も漸くの事で患者が一目見て激したと云ふ手紙を見せました……即ちこれです……どうかこれを御覽なすつて下さい……』

ジョーヴは院長の差出した封筒を開いて、手紙を一通取り出した。其の手蹟は顛ひを帶た歪みなりの文字で、皆無教育の無い者の書いたものである事が解つた。彼は其の手紙を讀下した。

（おれがトールから歸つて來ると、お前がゐない。おれは此麼うつたうしい事

は嫌ひだ、お前よりもおれの方がもつとひどい病人だせ。お前が早速退院して家へ歸つて来なければ、明日訪問時間に、必らずお前の體へ彈丸を二つお見舞申してやるぞ」

ジューヴは其の脅迫狀を讀んで行く中に、二度三度成程と頷かすにはゐられなかつた。

「なる程！なる程！全くだ！」

「貴方はそれを全くだと思ふのですか？」

「非常に明瞭な事と思ひます……」

「何事が起るのか御承知なんですか？」

「え……ですがどうぞ貴方のお話を承はりたうムいますが……」

「あ、私の話はもう殆どお仕舞ひです。勿論御推察でもムいませうが、私は此の手紙を讀むと、此の手紙を書いた人物の事で、ジョゼフィンと云ふ娘から二三の事を聞きました。此のルパールと云ふ男は其の戀人ださうです。此の事は其の娘の口から聞いた事なんですが、特に娘の言ふやうに、態と固有名を用ふ事に致します。此の男は何物に對しても退く事をせぬ、全部の爲めに全部を賭する男なんださうです！殺すと言つた以上は必らずこれを殺し、やらうと言つたら、殺人罪を犯してもやると言ふ、本當とは思はれぬ程の自尊心を最高度に抱いてゐるらしく思はれるのです……ジョゼフインは明日必ずルパールが殺しに来ると思ひ込んでゐるのです……」

「けれども充分警戒をしてあげると仰有つたでせうね？」

「勿論です！此處へ酒場かなんぞへ這入るやうに這入れるものではない、私

がかう聞いた以上は私が貴女に會ひたいと言つて來る奴等を見張つてゐてあげる、貴女の戀人は唯嚇かさうとしたばかりなんだらう、貴方に何をすることが出来るものか、それに貴方の容態では此の男の命令に従ふ事が出来ないのだからと諭してやつたのです……』

『そしたらそれに答へて何と言ひましたか？』

『何とも言ひません、言つたにした所が取るに足らぬ事です！……其の恐怖の危機が少し鎮まると、娘は非常にがっかりして了つたやうでした。唯黙つて涙をほろ／＼流すばかりなのです。私は娘が死刑囚のやうに思つて居り、私の警戒よりもルパールの大膽さの方をすつと信用してゐる事が解りました。でも少し眠りでもしたら、かう云ふ容態では家へ戻るなど、負つた迎、迎も出来ないと言ふ事が自分で解るだらうと思ひました！……』

院長のさう語つてゐる間ジューヴはジョゼフィンの恐しい境地を少しも感じてゐないらしい其の満足さうな莞爾顔を日成つてゐたがもう一度尋ねてみた。

『貴方の仰有る通りですよ、院長さん、念を押すのも異なるものですが、あ、云ふルパールの如き奴等、言ひ換へれば、あ、云ふ悪漢どもはさう云ふ點で自分等を養つてくれる女共を惚れさせる術を心得てゐます、だから女共は唯彼奴等ばかりを信頼するやうになる次第なのです。で貴方がなさつたやうなお話は凡べて何の役にも立たないのです。ジョゼフィンが怖がつて……覺悟をするのは當りまへなんです……だがそれはまあ夫れとして、貴方は奈何云ふ警戒をなさるお積りですか？……』

『其の前に、あの男があんな女に對する脅迫の理由が解つたと今貴方の仰有つた譯を承はりたいと思ひますね。事實あの女は實際に病氣なのです、其の男が』

いくら頑固者であつても、女に苦情を云ふ事はあるまいと思ひますがねえ？」
 ジューヴは暫時躊躇してゐたが、やがて細かな事は言はず、

「ルバールが此の手紙を書くに到つた動機をお話するのは、長くもなるし極めて面白味の無い事なんです。唯かう思つて下されば好いのですよ、院長さん今日情夫の脅迫に會つて怖がつてゐるジョゼフインは、此の頃の事ですが、警察に向つて情夫の悪事を密告したのです。それを男が聞いたのでせうか？ 女が自分を告發した事を嗅ぎつけたのでせうか？ また女が此處で、此の病院でべら／＼喋つてしまひはしやしないかと心配してゐるのでせうか？……要するに夫れも有りさうな事です……とも角も貴方を驚かしたかう云ふ命令を寄すだけの充分な根據のある事がお解りでムいませう。」

ジューヴは口を噤んで、ルバールの書いた手紙を裏返したりなどして見てゐ

たが、最後に自分の手鞆の中へ藏ひ込んだ。

「此の手紙は私がお預りしておきますよ、院長さん、此れはルバールに犯行意志のある證據物件なんですからね……若し彼奴が此の脅迫を實行したとすると、豫謀を否認する事は困難だらうと思ひます。」

「脅迫を實行するんですつて？ それぢや其麼事が出来る事だと思つてゐらつしやるんですか？」

「では院長さん、貴方には其麼氣がしやしませんか？」

「え、何事でもしかねない奴もありませうが、だつて貴方……ルバールは三時間も前から此處へ、此の病院へ情婦を殺しに來ると云ふ事を發表してゐるんぢやありませんか。つまり犯行の意志を豫告してくれば、それを傷害させないようにする事は容易な事ではありませんか？……」

『つまり警察で此の犯罪を制止する事は易々たるものだど仰有るのですね？』

『勿論……さうですよ……』

『それは貴方、間違つてますよ！』

『間違つてゐるんですと？』

『さうです！ 間違つてますよ、院長さん。簡短な理由として、貴方には大部分の人に通用な、警察萬能であり、警察は悪漢を捕縛し得るもの、悪事を制止し得るものと云ふ確信を抱いてゐらつしやるのです……それが誤解です！ 吾々警官と云ふものは個人の自由を保護しながらも無数の規定條例に依つて、有効に活動する事を阻礙せられて居ります。私もそれを可とは認めますけれど、吾々の行動に幾分自由を缺く處があります。斯様な殺害的脅迫を爲すルボールが如き奴は直ちに捕縛されるべき筈であります。けれども事實は今私が街上

で彼奴に出會つたとしましても、かう云ふ理由で捕縛する事が出来ません……私のポケットには拘引状がありませんでせう？ で……』

ジューヴは暫時黙して、更に熱心に話し出した。

『でかう言ひたいと思ひます、勿論貴方に會得の行かないやうな微細な點に入る必要もありませんから、簡短に申しますが、正當な人達は犯罪人に對する武器を剥がれてゐるのです！ 一人の人が自分の命を擲つて、其の目的が何であらうと、自分の狙つてゐる目的へ到達する爲めに全部を賭して突進しようとするれば、其の人には目的に到達する機會が充分あるでせう！ ルボールは自分の情婦を殺害しようと思つてゐます。恰も好し、吾々が其れを知りました。私は必要な警戒は悉く致します。明朝此の病院に多數の探偵や、手引きを張り込ませます……私は扉口々々を警戒し、訪問者を全部取調べます……それで奈

何です！ さう云ふ警戒にも拘はらず、ねえ院長さん、あらゆる手段を講じ、精力を傾倒したにも拘はらず、ルパールを捕縛しなければならぬものなら、捕縛して了ふでせうけれど、向ふが殺害しようと思つてゐる其の殺害を、制止し得るか奈何かは疑問なのです！」

「併し其奴は困りますなあ！」

「え、困ります、院長さんに同感です、けれどもさうなんですから、私に奈何する事も出来ません！……」

「するとジューヴさん、此の患者を、此のジョゼフィンと云ふ娘を他の病室へ移さねばなりません、必要なれば病院を變へなければなりませんね？」

ジューヴは頭を振つた。

「そしてルパールに此の事件が吾々に訴へられてゐる事を知らすんですか？」

彼奴に 戦を挑むのですか？ 悪漢特殊の戀慕の情を煽り立てるのですか？……いや、院長さん、さう云ふ事をしては不可ません。彼奴には何時だつて此の娘を見つけた出す事が出来ませう。娘の利益としても、社會の利益としても、爲すべき事は向ふが来なければならぬものなら、却つてジョゼフィンの寢臺の傍迄ルパールを誘寄せるのです。そして殺害しようとする間際になつて、一舉に悪事を防止して、事實の上で彼を捕縛するのです、まだ罪人とならなくても、悪事を働かうとした事を否認する事を得ぬ時に捕縛するのです！……」

モーヒル氏は尙ほ深く熟考してゐた。

「かう云ふ事件にかけては貴方の方がずつと優れてゐられるのだから、貴方のお説の前にお辭儀をしない譯には行きませんよ、貴方の觀察を用ひない譯には行きません……奈何なさるお積りですか？……」

『先づ病院へ行つて、私が自身で場所の状況を調べる。其處で悪漢が如何なる方法に依つて犯罪を敢行し得るか研究する……部下を何處に隠しておくが好いか豫め知つておく……今はまだお話しする事が出来ませんが……取るべき警戒法は場所の研究に依つて定められます……』

モーヒル氏は看護人を呼んで、ジュエツをパーテル病室に案内するように言ひつけた。

『とも角もジュエツさん。』と院長は探偵と握手しながら言つた。『申す迄もありませんが、病院の者は皆貴方の御自由にお使ひ下さい……お言葉通り致させますから……貴方の好いと思ふ事をなされば、私は大丈夫だと思つてゐます。貴方は困難な事件におかゝり合になつたのですから、私の出来る限りの事はお手助け致しませう……』

ジュエツは愛想の好い院長の言葉を謝して、此の訪問を手早く切上げたのを喜び、彼自身では相手に既に大分暇取らせたと思つて其の部屋を出た。

『奇怪な話だ!』と管理部室から院庭に行く階段を降りながらジュエツ探偵は考へた。『此の悪漢事件は實に奇怪だ……俺はあのジョゼフィンがルパールに注意を向けさせるやうな事をして、俺を弄る積りではないかと考へてゐた。然るに此の最後の手紙を見ると、全く偽はりではないらしく思はれる……他面からこれを見るに、あの男が此處へ冒險を敢行しに来るであらうか? 俺には眞暗の中で物を見てゐる様な氣がする。ルパールもジョゼフィンが保護を求めた位の事は考へねばならない筈だ、さすれば彼奴は静かにしてゐる所なんだ! あゝ云ふ種類の奴のする事は皆無解らない!……彼奴等は卑怯な癖に恐しく大膽なんだ!……此處に一婦人を、一病婦を襲はんとする一匹夫かゝる、けれども

實を云ふと、其の男は犯罪に不可思議な偉大な力を持つてゐるのだ……公々然として脅迫をするのだ……あ、實に立派な勝負師だよ！」

ジューヴの前に立つた看護人は振返つて探偵に尋ねた。

『パートル病室に御案内するのですね？』

『さうです、けれど其の前に其の病室の話を伺つておきたいのですがね。それは本院の何處ら邊からなんですか？』

看護人は立停つた。ジューヴ等二人は其の時ラリボアジェル病院の主部を作す大きな建物の傍にゐた。看護人は屋根の下の一並びの窓を指示した。

『あれですよ、パートル病室は丁度建物の角になつてゐる窓から始まつて軒蛇腹の傍にある窓迄行つてゐます。』

『病人は両方なんでせうな、男子と婦人と？』

『はい、男子ベッド二十臺と婦人ベッドが三十臺あります。』

『勿論二室でせうね？』

『勿論二室です。右が男子室で左が婦人室です。』

『そして婦人室に行く通路は奈何なつてゐますか。』

看護人はジューヴが奈何云ふ人か知らないので不思議さうに探偵を眺めた。

『一體此の先生は奈何しようつてんだらう？』と思つたが、何とも思ひつけないまゝに、

『え、それや譯ありませんよ、貴方。パートル病室は階段の一番上にあるんですから……突當りの扉口からでも婦人室に入れます、階段の上にある扉口と言つた方が好いでせう、又臨床部長の實驗室や看護人室や附屬室に通じてゐる奥の扉口からでも行かれます……』

『成程……で訪問者等は何處から入るんですか？』

『奈何云ふ訪問者ですか？』

『病人の親だとか友達だとか云ふ人は？』

『あゝ……成程、さう云ふ訪問者は何時も大階段を通つて行くのです。』

ジューヴは看護人の指示した窓を稍久しく見成つてゐたが、一寸と肩を搔ると又歩を運んだ。

『それではパーテル病室へお伴れ下さい……』

『さあどうぞ。丁度訪問時間ですから、貴方には面白いだらうと思ひます……』

階段を登り終つて、尙ほ看護人に伴はれて婦人室に入ると、パーテル博士が患者を診療してゐる所であつた。彼は嚴かな顔をし、重々しい態度で、親切に

一人々々患者の工合を尋ねながら、恭々しく彼の周圍に集まる看護人の話を聞きながら、寢臺から寢臺へ廻つて行つた。それから學生、醫師、助手などに向つて、効果のありさうな言葉を求め乍ら、一寸した講義をした。

ジューヴも物好に、否寧ろ學生として其の中に紛れ込で講義を聞いてゐた。

『諸君、唯今吾々が共に診断致しました患者は間歇熱の非常に輕症な且つ非常にクラシクな症状を呈して居ります。血精診断は何等價値ある効果を齎らしませんでした。現在の状態に於ては……』

手が一つジューヴの肩にかゝつた。

『パーテルさんは偉いねえ！』と探偵の肩に手をかけた其研究生が囁いた。『あれでこそ血精診断が何時も絶對的に有意義なんだよ！……君は今朝六時に見たらう、窒扶斯症状のある女を？……君は奈何思ふ？』

其の突然の質問に驚いたジュエツ探偵は、奈何答へようかと思つて、ふと後を振り返つて見ると、思はずあつと驚かすにはゐられなかつた。

「貴方は！ 先生ですか？」

「や！ ジユエツさん、此處にゐるんですか？ 僕を探しに来たんですか？」

ジュエツは呆れて物も言へなかつた。

探偵の肩に手をかけてゐた研究生はドクトル・シャレツクだつたのである！

彼はシャレツクを片傍へ引張つて行つた。

「貴方は此の病院に關係してゐらつしやるのですか？」

「ジュエツさん、變つた事がありましたか？ 私に會ひに来られたのですか？」

「いゝえ、少しも！……貴方がラリポアジェルにゐらつしやらうとは思ひませんでしたよ！」

「いゝえ、聴講を許されてるだけなんですよ。」

「さうですか、私も一寸見物に来たやうな次第なんです……」

「唯それだけで？ まあ何はともあれ先日はいろいろ御世話になりました。有難うございました。……お伴れの警官からすんでの事に犯人にせられて了ふ所でしたつけ！」

「ねえ！ あの様子が……」

醫師は頸を縮めた。

「どうも驚きましたよ……でも本當に捕縛されたり告訴されたりするやうな心配は致しませんよ。私の過去は清淨なもので、これ迄あの様な法律上の罪人に間違へられるやうな事は無かつたんですからね……唯世間が悪いのです。人間

てものは實に酷いものですなあ、私を疑はないまでも、少くも悪意を以て見ら

間違へられるやうな事は無かつたんですからね……唯世間が悪いのです。人間

れ、ば、見られますものなあ！』

『まあ、く、シャレットクさん！』

『い、え！……さうでない！ あれが人生と云ふものなんぞでせう！ だつてあの事件に誰か犠牲があつたとすれば、實際私ですよ！ 殺害された女を家中へ擔ぎ込まれて、悪い推察をせられた上に、泥棒迄……』

『實際ですなあ……』

『而も私はお金持でもないんです！……所で變つた事がありましたか？』

『まだです。』

『何にも手懸りはありませんか？』

『何にもありません！』

『でも真相を探知する必要がありませんか？……』

ジュエツは奮然とした。

『それや請合ひます！ 此の事件には實に驚くべき、實に奇怪な大々的な事情があるのですよ……私 は真相を探知したいと思つてゐます、だから發見してお目かけませう、信じてゐて下さい……』

シャレットク醫師は一寸考へるやうであつた。

『必要な事は殺された女の本體を探知する事ですなあ。』

『でなければ、せめて其の女が奈何して殺されたかと云ふ事を推定する事です、ねえ、シャレットクさん、これは秘密ですが、貴方にも何かお考があるやうに思ひますか？ 醫學上の見地から見ても、あの致死原因は大凡何でせうな？』

シャレットク醫師はもう一度思惑ふやうな様子をした。

『解りません！ 私には何等の意見を立てる事も出来ませんね……けれどジュ

「ヴさん、貴方も私の様に法醫學に御造詣がおありですけれど、大した結論をお立てにならないですか？ 死體は打たれて壓潰されてゐたでせう？ 犯人は奈何云ふ處置を取つたものでありませう？ 私は白状しますけれど、それを求めるのに頭を悩ましてゐるのです……と云ふのは私に罪をかける積りで無かつたかと考へるに到つたからなんです……」

「シャレック醫師はふと口を噤んだ。一人の助手が彼を手招きしてゐたのである。」

「一寸御免なさい、同僚を待たしてはおかれませんか、私のしておいた手當の事で用事があるんでせう……ですが貴方患者を一人見にゐらつしやいませんか？ 御氣があつたら是非おいでなさい……」

「いや、どうも有難う、孰れまた……」

「ぢや其のうちに……」

「はあ、其のうちに……」

「シャレックに別れると、ジュエヴは苛々して待つてゐる看護人の傍に戻つて来た。」

「益々不思議だ！ これぢや全然解釋がつかない。ジョゼフインはルポールがシャレックの家へ泥棒に行くと言つて寄した。俺がルポールを跟けて行くと彼奴は逃げて了つた……俺は何事も無い部屋で一夜を明した、すると其處で恐しい犯罪が行はれてゐた……何事も無かつたばかりか、何にも聞えもしなかつたのだ！ それなのに犯罪が俺の直ぐ傍で行はれたのだ。其の家の主人のシナレック醫師にも何にも聞えなかつたし又何にも見えもしなかつた、そして翌朝自分の家に發見された被害者を知つて居りもしなかつたのだ！……而も密告者

のジョゼフインは病院へ入院して、胃病だつてんだ！……ふむ……恐らく毒害だらう？……そしてルパールの脅迫状を受取つたんだ……それから俺が保護する爲めに此の病院へ来ると、出會した人がある……誰あらう、シヤレツク醫師ではないか！……何もかも眞暗闇だ！何もかも譯が解らない！……』

ジューヴは一緒に来る看護人を振返つた。

『貴方は私が今話をしでゐた男を知つてゐますか？』

『シヤレツクさんですか？え、知つてゐますよ。』

『奈何云ふ名義で此處にゐるんですか？』

『あれは外國の醫師だと思ひますよ……白耳義人らしいやうです……ともあれ臨床講義を聴いたり、病院の實驗室で研究したりする事を許されてゐる醫師なんです……けれども助手でも無ければ、職員でも無いのです……』

七、白晝の銃聲

其の日の午後、パートル病室は常よりも混雑してゐた。訪問時間ばかりはしめやかに單調な病院生活に、愉快な賑やかさを伴ふ患者の友人や親類などの訪問が許されたばかりでは無く、幾人かの醫師が手に備忘録を携へて、一口も口を利かずに寢臺から寢臺へと廻つて行つて、名札を調べたり、體温表を見たりテーブルの上に載せてある藥瓶の貼札を検査したりしてゐたのである……

醫師なのか？

病室を取り捲いてゐた看護人や看護婦達は其の人達を呼ぶのに恐々（先生……）と云ふ稱呼を使つてゐた……其の人物達は確かに見かけぬ人達であつた……恐らく醫學研究の爲では無くて、何か他に理由があつて此處に来てゐる他所の人

人であらう……

患者達、少くも痛みや熱の激しくない患者達は、其の人達の本當の身分をちやんと教へられてゐるやうであつた。極めて小さな物音がしても其處此處に囁く聲がして體を震はした。そして一同が一齊に同じ方向に、部屋の一隅に眼を注ぐのである。

其處に一臺の寢臺がある。他の寢臺と少しも違ひは無いが、唯少し離れてゐるだけの事だ。其の中にはルバールの情婦のジョゼフィンが臥てゐた。女は激しい熱に捕はれて、苦しげな息をつきながら、昏昏として夢幻の中を彷徨してゐた。とも角も自分の周圍に起つてゐる事も知らぬ程の容態であつた……

其の一隅は、無論病室の端にあつたので、訪問者の出入する扉口から離れてゐて、助手の室に近く、重病人を收容する場所であつた。ジョゼフィンの向側

には望み無しと認められた患者の寢臺が三つ並んでゐた。隣りには（臨時至急訪問許可）と云ふ札の下つてゐる其の朝收容された老婆の寢臺があつた。老婆の顔は十重二十重に巻かれた縋帯と厚く敷いた綿とですつかり掩はれて了つてゐた。

病室の扉口に懸けてある時計は今三時十五分前を報じた。大きな鐘の音が病院中に響き渡つた。と一人の看護人が病室の扉口へ出て來て怒鳴つた。

『三時十五分前、見舞のお方は十分以内にお歸り下さい……』

其の日の朝から此の病室を監視してゐた二人の助手は微笑を交した。

『三時十五分前だ。茶番狂言も片附いたね。ルバールは遂々來なかつたね！……』

「ふむ、三時じにと言つたんだから、まだ十五分ふんあるよ……」

「くだらない占うらないだ！」

「どうして、君きみ、几帳面きちょうめんな男をとこと云いふ者は……」

若い方わかの男はうはポケットから時計とけいを取と出した。

「もう十五分ふんどころぢやない、きつかり十三分ふんだ……」

「だつて君きみ、ちやんと警戒けいがいしてあるんだぜ？」

「ぶツ！ ルパールのやうな奴やつに向むかつて警戒けいがいなどが何なんの役やくに立たつものか！」

「君きみは冗談じやうだんを言いつてるのかい？」

「もう十一分ふん……」

「馬鹿ばかだよ！ もう今いまとなつて何なにが出来るものか？ 吾々われは皆承知みなしやうちしてるのだ

皆此處みなこゝにゐるのだ……病室びやうしつは看守かんしゆで一ぱいなんだぜ……」

「後八分あとふん……」

「解わかつたよ！ 時間じかんを數かぞへて僕ぼくを苛立いらだたせるつもりかい！」

「後六分あとむん……」

「そして如何いかにも真面目まじめさうな風ふうをして其塵事せんじを言いつてるんだね！ だが君きみの忘わすれてゐる事ことが一つあるんだ。もう病院びやういんへは入はいられやあしないよ……門もんは閉しまつて、訪問者ほうもんしゃは行いつて了しまつたんだ……」

「もう三分ふん……」

「莫迦はかな、言いふだけ野暮やぼだよ……」

「もう二分ふん……」

「はツはツ、得心とくしんがいつたらう……冗談じやうだんも好いい加減かげんにするが好いい……」

「もう一分ふん……」

ボン!!!……ボン!!!

静まり返つた病院内に突然二發の銃聲が轟いた! 一挺の拳銃から連發された二發の銃聲が四邊に長い反響を残した!

銃聲と共にキャツと叫ぶ悲鳴があつた!

患者達は驚いて寢臺から跳起きると病室の隅の方へ逃げた。と助手や醫師と思はれてゐた警官等は一齊にジョゼフインの寢臺の方へ馳寄つた……

扉がぱたぱたと開いた。

方々から人が飛込んで来た。

呻聲や悲鳴や驚きの聲が騒々しく入混つた。

「誰が撃つた?」

「此處には誰もゐなかつた!」

すると其の混亂を壓するやうに沈重な聲が聞えた。

「オヤ、水をかけられたぞ! これや一體奈何云ふ事だらう?……」

けれども助手はジョゼフインの寢臺の方へ馳け寄つた。ジョゼフインは死んだ様に眞蒼になつて、身動きさへもしなかつた。其の夜着には大きな赤い血汐が吹き出してゐた。

若い醫師は手早く傷口を改めて聴診した。彼は稍平靜に戻つたらしく思はれた。

「氣絶だ! 氣絶したばかりだ!」と彼は取巻いてゐる人達に言つた。

そして振り返りざま激しく人々の話聲を制して、

「ジュウザさん! ジュウザさん!……」と呼んだ。

若い醫師はありつたけの聲を振絞つて探偵を呼び立てた。と彼の直ぐ傍で、

今しがた水がかつたと云つて不審がつてゐたと同じ聲がした。

「え、氣絶したわけだと云ふ事はよく解りましたよ。第一發の彈丸が腕に當つたのですよ……そして第二發目は……」

ジョゼフインの寢臺を取圍んでゐた群集は、さう答へる人を通す爲めにさつと道を開いた。

と一同は驚きの餘り鳴を鎮めて了つた……

今しがた迄眠つてゐた老婆が寢臺からのこゝろ降りて來る所であつた。老婆はバラ／＼と縋帶や鬘を解き捨てた。とジョーヴ探偵の平靜として凜然とした顔が一同の眼前に現はれた！……

一同の呆れてゐるのを眼にもかけず、探偵は油斷無く話を續けた。

「皆んな解つてゐる。唯一つ訝しいと思ふのは僕がすぶ濡れになつた事だ！ルパールの發射した時何處から水を打つかけられたのだらう？……」

「それや何でもありません、御覽なさい。ジョゼフインは水を詰めた護謨の蒲團の上に寝てゐます、これは熱病病者に大方用ひられる手當で……彈丸が蒲團に當つたので穴か穿いたのでせう、で水が走つた、そして……」

「そして僕が浴びせられたのか？……成程！」

「ところで病人は奈何した？」

「擦過傷です、肩に打撲傷をうけたのです！……犯人は病人の位置が好かつたので撃損じたのです……」

「運だ！……」

「え、運です……そして犯人は逃げました……」

「逃げた？……早く行け！ 見に行かう……」

探偵は朝から其の室をぶらぶらしてゐた見知らぬ男共を手招きした。

「報告は？」

が警官達は一齊に首を振つた。

「誰もかも皆んな何にも見なかつたのか？」

「はあ……」

ジューヴは更に助手や看護人や看護婦や、今の騒動に驚いて跳起きた儘、まだ寢臺にはひらうともせぬ患者達にも尋ねて見た。

「貴方がたも誰にも氣が付きませんでしたか？……奈何です？」

ジューヴの質問に見たと答へる者は誰も無かつた。

「不思議だなあ。僕の寢臺からは、ルバールが此の部屋へ這入つて来る時に見

られる恐があるので何處の扉口をも監視してゐる事が出来なかつた、其處でジョゼフインを見張つてゐる役に廻つた。彼奴が這入つて来れば、ジョゼフインがビク／＼して戦くから解るだらうと思つてゐたのだ……所がジョゼフインは戦かなかつた……すると此の女はルバールの這入つて来る所を知らなかつたのだ……併し——ジューヴ探偵はさう言つてゐる中に熱して来た——併し開いてゐる窓も無ければ、扉も閉つてゐるし、誰も出て行つた者は無し……そして二發の彈丸が發せられたのだから、這入つてゐなければならぬ筈だ！……」

ジューヴは自分を取巻いてゐる人々を掻分けて助手を呼んだ。

「僕は餘り配してはゐませんでしたよ、だつて僕は建物の外にゐて、五十人ばかりの見張の警官の傍にゐたんですもの……ルバールの奴多分這入り込む手段を見つけたのでせう。そして目瞬きする間に此處から出て行つたものだと思